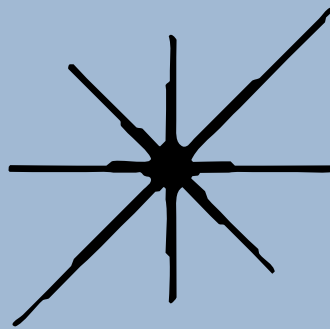


コメット通信 20

[’22年3月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 ウクライナ侵攻の深層】

文学から見た帝国意識と独立志向

——ウクライナのアイデンティティの起源

大野斉子——3

マリウポリ出身の画家クインジのことなど

中村唯史——6

フェイクニュースを信じるのはだれか

乗松亨平——8

「歴史の発火点」としてのウクライナ

——なぜプーチンは侵攻したか

武隈喜一——11

中之島美術館

——愛される黒のゆくえ

加藤有希子——15

出版よもやまばなし

——出版界にもしウクライナ国民の何万分の一ほどの血を流す勇気があれば……

高須次郎——17

【連載】

友としての本

——本棚の片隅に 1

小林康夫——20

分割－複製の彫刻

——コンテンポラリー・スカルプチャー 3

勝俣涼——23

酒井順子から清少納言へ

——裸足で散歩 20

西澤栄美子——25

再会するために

——Books in Progress 18

村山修亮——28

ウクライナから遠くはなれて

——校正刷の余白に 3

鈴木宏——30

【特集 ウクライナ侵攻の深層】

文学から見た帝国意識と独立志向

——ウクライナのアイデンティティの起源

大野斉子

1 ウクライナ侵攻に見るロシアの帝国意識とウクライナのナショナリズム

ロシアによるウクライナ侵攻は世界に衝撃を与えたが、そこまではするまいという推測を裏切られた驚愕もあれば、侵攻を予期した上での落胆などいくつかの反応があっただろう。しかし両国の関係が音を立てて崩れていくなかでこの戦争がこの地域に、また国際社会にいかなる禍根を残すのかという懸念は共有されているものと思う。ウクライナへの侵攻は暴挙であり容認されるものではない。筆者は文学・文化領域を専門とするため、必要に応じて触れる国際関係や歴史学については素人の域を出ない。記述の中で誤りがある場合にはお許しを願いつつ、今回の侵攻を受けて文学の分野から考えたことを書くことにする。

近代以降のウクライナとロシアの歴史的関係を、ロシアによる帝國的な支配のもとでウクライナが分離／同化の道を模索し、独立を果たしたプロセスと大まかにスケッチした上で今回のウクライナ侵攻を考えたとき、変数として浮かび上がるのはロシアの——特に政権の——帝國的意識の先鋭化である。そのことはウクライナとロシアが一つの民族であるとして侵攻を正当化するロシア当局の主張にも現れている。この主張のルーツはベラルーシを含めて東スラブの三民族は一つであるとする、帝政期から存在した東スラブ兄弟論であり、過去に何度も浮上してきた。ロシアを三民族の盟主とみる帝国意識に裏打ちされたこの論調が今、ふたたび揺り戻しを見せている。

ロシアによるウクライナの帝國的支配は長かった。とはいえ、帝政時代、ソ連時代を通じて二者の関係性は変化を続け、最後にはウクライナの独立を承認した歴史がある。その過程に一貫して存在したのは、帝国統治を前提に世界を文明圏を基本単位として捉える観点と、国民国家を基本単位として世界を捉える観点（時代によっては、民族を分離主義的に捉える観点）の対立であった。現在、ロシアとウクライナが戦争状態にあるため、この二つのパラダイムの対立は国家の対立に重ねられがちである。しかしウクライナ内部にもロシアへの同化志向が存在したことを考えれば、ロシア側が帝国主義、ウクライナ側がナショナリズムと単純に分別することはできない。そこでこの二つの立場を個別の状況や国からひとまず切り離し、それぞれの言説としての側面に注目してみたい。

日夜報道される市民の声には国民感情や民族意識が時折顔を覗かせる。対立構図の中で、民族的アイデンティティが先鋭化するのはいりからぬことであるが、その内容は最先端の価値観に整理・統制されてなどいない。アイデンティティは言説の産物であり、驚くほど古い観念や過去の国際秩序の幻影、比較的新しい共生の志向などが絡み合っただけで多面体を構成している。その中で顕在化する部分が状況に応じて変わることはあっても、アイデンティティを構成する観念はそれぞれに歴史的な系譜を持つ。今日先鋭化を見せている帝國的な統制を行うロシアとそこからの脱却を目指すウクライナという対立構図も同様である。

2 19世紀におけるウクライナ独立のヴィジョン

では、このような構図はいつごろ作られたのだろうか。関係する節目はいくつか考えられるのだが、ウクライナにおいて表象とともにアイデンティティが構造化された起点は、19世紀前半の文化運動

に置かれている。

文化運動に先立つ 19 世紀初頭には、まだウクライナの土地や人の定義づけに揺らぎが見られた。例えばこの時期の歴史論争で、キエフはどの民族に帰属するのかという論題に関心が集まったことは象徴的である。その背景には複雑な歴史の結果としてウクライナ人のみならずポーランド人やロシア人などが共生していた現実と、歴史学の黎明期ゆえの論拠不足、文学的な解釈の自由さがあった。

こうした時期を経て 1830 年代から 1840 年代ごろにロマン主義的思潮の元に文化領域でウクライナのアイデンティティ形成の端緒が開かれる。その時にアイデンティティの根拠を提供したのが歴史であった。歴史は多義的な概念であるため、実際に生じた出来事という現実的位相と、構築された物語という言説の位相に分けて当時のウクライナにおけるその働きを考えてみたい。すると前者においては考古学的な発掘作業やフィールドワークを伴う事業が進められ、後者においてはウクライナのみならずロシアの文学者までも魅了した『ルーシの歴史』のような文学的歴史書が出回るなど、ウクライナの民族化を推進したことが観察される。とはいえ、これはウクライナに限ったことではなく、同時期のロシアにおいて自己言及的なエスノグラフィが流行したように、ロマン主義時代の「歴史」を触媒としてヨーロッパ各国で共通して生じた現象である。

巨視的に見れば、ウクライナの文化領域におけるナショナリズムの興隆は、同時代のヨーロッパの文化史的展開の帰結ということになるが、ロシアの統治下にあったというウクライナの個別状況は、この時代の民族化の内容に独自性を与えた。

一つ目の特徴として、ウクライナ人内部におけるロシアへの同化志向と分離志向の共存が挙げられる。それぞれを代表する作家として半ばお約束のようにして挙げられるのがロシア帝国で活躍したゴーゴリと、ウクライナ語で詩を書いたシェフチェンコである。二人ともウクライナとロシアの分岐や植民地化への歴史を把握していた点では共通するが、ゴーゴリは臣民としてロシア帝国に尽くすことを是とし、シェフチェンコはウクライナの独立を悲願として打ち立てた。両者の対照性は出身階層や教育内容など複数の観点から説明が可能だが、今それには立ち入らず、帝國的支配を受け入れるのか、ナショナリズムを突き詰めるのかという、パラダイムの違いとして捉えることにする。

では両者の違いは作品にどのように現れているのだろうか。ウクライナを舞台としたゴーゴリの作品群『ディカニカ近郷夜話』と『ミルゴロド』では、割り切れぬ内容を多分に含むことを留保しておかなくてはならないが、民族としてのウクライナの自滅が象徴的に表現されているところが特徴的である。それに対してシェフチェンコの作品は自由を勝ち取ることに至上の価値をおくため、敵との戦いを鼓舞する詩文はいかにも猛々しい。シェフチェンコが必ずしも武力での戦いを志向せず、流血の無益さや言葉への信頼を表明する複雑さを伴っていることは断っておきたいが、シェフチェンコはロシアとは異なる被支配民族としてウクライナ人を表象することによって、苦しみを呼び込んででもロシア帝国から離脱することを呼びかける。

3 アイデンティティの相対性

民族化に見られる二つ目の特徴は上に述べたことと部分的に重なるのだが、帝国支配という制約の中でアイデンティティが模索されたことである。シェフチェンコが文学で示した独立のビジョンには、当時の実態を反映してウクライナ人の流民化という暗い見通しがついてまわる。同化志向のゴーゴリの作品でもウクライナには滅亡の影がちらついている。両者の間には、ロシアを対等の敵とみなすのか、ウクライナに対するある種の上位概念と見なすのかという違いはあるが、ロシアとの相対的な関係性の中にウクライナを捉えている点は同じである。

現在のウクライナでシェフチェンコは文学的英雄として扱われている。このことが何を示すのかについて考えてみると、独立した民族、国家としての自己意識の源流として遡及的に重視されているということに加えて、現在でもなお、ウクライナの自己意識に占めるロシアとの関係性が構造的にあまり変わっていないことが示唆されるように思う。これは作品のイデオロギー的な側面に限った話ではあるが、現在の状況を見る限りロシア内部においても同様にウクライナに向き合ったときの自己意識の変化は乏しいように思える。ロシアにおいてウクライナとの関係はどれだけ問われてきたのだろうか。

アイデンティティが所与の特質からではなく、相対的關係の中で作られるということは、ロシアとウクライナの膠着した関係を無限に再生産する要因の一つであったかもしれないが、一方で、未来に向かう可能性も秘めているように思う。ロシアとウクライナ相互の関係性はより大きな国際関係の中に包摂されているし、ロシアとウクライナの関係が国家という枠組みだけで成り立っているわけではない。国際社会とこの地域との関係のあり方を問い直すことや、国家の枠組みに縛られない営みに視点を向けることによって、ロシアとウクライナの関係を外側から解きほぐしていくことはできるかもしれない。また、相対的關係の中で共同体の意識が構築されるとするならば、この地域から見て外部にあたる国際社会もまた、自己意識の変容を迫られているのではないだろうか。

執筆者について――

大野齊子（おおのときこ） 1976年生まれ。宇都宮大学国際学部准教授。専攻、ロシア文学・文化、メディア論、比較文化論。小社刊行の主な著書には、『18世紀ロシア文学の諸相――ロシアと西欧 伝統と革新』（共著、2016年）が、訳書には、マリーナ・コレヴァ+タチヤナ・イヴァシコヴァ『メイド・イン・ソビエト――20世紀ロシアの生活図鑑』（共訳、2018年）がある。

【特集 ウクライナ侵攻の深層】

マリウポリ出身の画家クインジのことなど

中村唯史

先日、50歳代のロシア人の知人が、私に次のようなことを話してくれた。「自分はソ連時代に教育を受けた人間なので、今回の戦争の映像が、子供の頃から学校やテレビで見してきた第二次世界大戦時のウクライナの悲惨な映像に重なって見えます。ただし、ひとつ決定的に違うのは、いまウクライナを蹂躪しているのがナチ・ドイツ軍ではなく、ロシア軍だということなんです……」。

突然、否応なく侵略者の側に分類されてしまったロシアの国民の、いまの屈託した複雑な心境は、想像に余りある。人気作家のボリス・アクーニン、昨年度ノーベル平和賞を受賞したジャーナリストのドミートリー・ムラトフ他の連名の声明は、ロシア軍の今回のウクライナへの侵攻を「恥辱」と呼び、「我々の子供たちが侵略国に住むことになるのはごめんだ」と訴えかけている。

実際に戦火の下にあって、これまでの平穏な生活を奪われてしまったウクライナ国民の苦難はと言えば、これはもう戦争経験のない私の想像を絶している。南東部の激戦地マリウポリの市街——というより、その廃墟——の凄絶な映像には言葉もない。

マリウポリは近代ロシア絵画、とりわけ風景画の巨匠と見なされているアルヒーブ・クインジの生まれ故郷だ。彼の生涯と創造は、今回の戦争の開始以来、急速に実体化しつつある、明快だが単純な「ロシア」と「ウクライナ」という二項対立の図式では捉えきれないものだ。

クインジはマリウポリ郊外で1841年に生まれた。貧しいギリシア人靴職人の息子であり、民族的にはロシア人でもウクライナ人でもない。早くに父親をなくし、徒弟奉公をしていた時から絵の才能で周囲を驚かせていたという。教会建築の煉瓦職人、パン職人、その後は主にダゲレオ写真の修整・彩色工としてマリウポリや、黒海沿岸の国際貿易都市オデッサで生計を立てるかたわら、現在はロシアとウクライナの係争の地となっているクリミア半島のフェオドシアにアイヴァゾフスキー(1817-1900)が作ったアトリエで教えを受けている。

ちなみにフェオドシアは海洋画家として世界的に評価の高いアイヴァゾフスキーの故郷だが、彼もまた民族的にはアルメニア人だ。「イワン・アイヴァゾフスキー」とは、「オヴァネス・アイヴァジャン」というアルメニアの姓名をスラブ風に言い換えたものである。19世紀にはロシア帝国の領土だったウクライナ南部やコーカサス等も含めた黒海沿岸地域は、「ロシア」「ウクライナ」「アルメニア」「ギリシア」などといった、現在の国別では捉えられない、活発で流動的な生活圏だったのだ。

クインジはその後、ロシア帝国の首都サンクト・ペテルブルクに移住、1868年からは美術アカデミーで学び、才能を認められたが、1874年からは「移動派」に参加し、その有力な風景画家となっていった。この「移動派」は、従来の貴族層ではなく、現在モスクワにあるトレチャコフ美術館の基を作ったセルゲイ(1824-92)とパーヴェル(1832-98)のトレチャコフ兄弟などの新興の民族資本家たちに支持されて、それまで規範とされてきたギリシア・ローマ神話や南欧・南仏の風景ではなく、ほかならぬロシアの民衆、自然、歴史、神話等を主要な題材とすることをめざした絵画運動だった。

クインジは当初は、霧に包まれ、色彩に乏しいが広大なロシア中部平原の風景を『秋の泥濘』や『忘れられた村』(ともに1872)などに巧みに描いて評価されたが、しだいに自分の故郷であるウクライナや黒海沿岸の風景画へと主題を移した。『ウクライナの夜』(1876)、『ウクライナの夕べ』(1878)、『ド

ニエプルの月夜』(1880)などである。月の光を浴びた風景の微妙な色調のグラデーションと調和を追求したこれらの絵には、自然物も人工物もたがいに齟齬なく有機的に結びついている、全一的な世界の理想が、象徴的に表現されているといわれている。

クインジは年を重ねるにつれ、しだいに作品をひとに見せることが減り、1910年に逝去するまで、倦むことなく一人で構図と色彩の実験を推し進めた。亡くなるまで後半生のほとんどをペテルブルクで過ごしたが、『エリブルス、月夜』(1890-95)、『ダリヤール峡谷、月夜』(1890-95)、『クリミア』(1900-05)など、黒海沿岸域を題材とする作品を数多く描き遺している。

クインジの画集を眺めていると、彼には特定の場所への愛着があったことがわかる。特に代表作『ドニエプルの月夜』で描かれたドニエプル川の緩やかな蛇行を河岸の丘からのぞむ光景は、『ドニエプルの朝』(1881)他の作品にも繰り返し表れている。晩年の『夜なるもの』(1905-06)は、高くかかる三日月と地平線から明るみつつある空の下で、放牧されている馬が草を食み、牧民が消えかかった焚火の周りで眠っている、何か永遠を感じさせ、抽象度の高い、神話的な印象を与える作品だが、やはり『ドニエプルの朝』と同じ川の蛇行が、同じアングルから描かれている。クインジはほぼ25年に渡ってペテルブルクの地にありながら、ウクライナの大河の特定の岸辺の風景に執着し続けたのである。

民族的にはギリシア人、国籍はロシア帝国、郷愁の向かう先はマリウポリ、さらにはウクライナと黒海沿岸。帝国の首都である北方のサンクト・ペテルブルクに暮らしつつ、故郷の明るい風景を愛し続けたクインジのような人を、「ロシアの画家」と呼んでも「ウクライナの画家」と呼んでも違和感が残るのである。民族や地域によって明確に分割できないような複合的・重層的な社会にあって、クインジはさまざまなアイデンティティを自分のうちに持ちながら、そのことに特に矛盾を感じてはいなかったように見える。

戦争当事国のみならず、日本を含め世界中で今、「ロシア対ウクライナ」という二項対立が急速に強まり、実体化しつつある。戦争という、否応なく人々を敵味方に分けてしまう状況下では、それはあるいはやむを得ないことなのかもしれない。だが少なくとも、このような図式によって、ときに見失われてしまう事実があることには意識的でありたいと思う。本稿で触れたクインジのような、重層的な社会で生きた人々の軌跡が辿りづらくなるだけではない。たとえば今回の戦争で死者が5,000人を超え、市街の90%が破壊されたというマリウポリの市民のかなりの割合がロシア人であるという事実(2001年の統計でウクライナ人49%、ロシア人44%、ギリシア人4%)なども、二項対立の図式は人々の意識から覆い隠してしまうのである。

執筆者について——

中村唯史(なかむらただし) 1965年生まれ。京都大学大学院文学研究科教授。専攻、ロシア文学・ソ連文化論。小社刊行の主な著書には、『[自叙の迷宮——近代ロシア文化における自伝的言説](#)』(共編著、2018年)がある。

【特集 ウクライナ侵攻の深層】

フェイクニュースを信じるのはだれか

乗松亨平

3月14日、ロシアのテレビ「第1チャンネル」のニュースの生放送中、同局の職員マリナ・オフシャニコワが乱入し、反戦のメッセージを書いた紙を掲げた。

NO WAR

戦争を止めてください

プロパガンダを信じないでください

この番組はあなたたちに嘘をついています

RUSSIANS AGAINST WAR

第1チャンネルをはじめとするロシアのテレビが、嘘で塗り固めた「フェイクニュース」を流していることは、今般の戦争を受けて広く知られるようになった。フェイクニュースという最近の現象のようだが、そうではないことをこのメッセージは思い出させてくれる。「嘘によらず生きよ」という有名な言葉をソルジェニーツィンが発したソ連の時代から、ロシアのマスメディアは政府の管理下にあった。その管理が一時的に崩れた1990年代にも、テレビ各局はオーナーのオリガルヒの意向にしたがって、政争の道具とされていた。

このメッセージですぐに目につくのは、最初と最後の行が英語で書かれていることだ。この2行とそのあいだの3行は、微妙な齟齬をきたしている。あいだの3行は、嘘を信じず戦争に反対しようと、ロシア語でロシア人に訴えている。それに対して英語の2行では、「ロシア人は（すでに）戦争に反対している」のだと語られている。嘘をつかれている「あなたたち」と、戦争に反対している「RUSSIANS」は、いずれもロシア人のはずだが同一の主体ではないことを、このメッセージは生々しく伝える。メッセージを掲げたオフシャニコワ自身は、むしろ「RUSSIANS」の一人である。その勇敢な姿は、わずか5秒ほどだが忘れがたくテレビ画面に刻まれ、その後も報道されている。画面にはもう一人、「あなたたち」に嘘をついているアナウンサーの姿も映っている。しかし「あなたたち」の姿はない。

嘘をつく権力者と真実を告げる知識人という構図の陰で、「あなたたち」の姿はいつも見えづらい。今回の戦争でも、私が直接に知るロシア人はほとんど「RUSSIANS」で、嘘を信じている者などいるのかと戸惑うほどだ。しかし「あなたたち」は実在する。彼らは地方に住んでいてインターネット環境もなく、嘘の報道を浴びせられ騙されているだけの、無知で無辜の人々なのだろうか。本稿では、いつも見えづらい「あなたたち」の姿を描く、社会学者レフ・グトコフの論考を紹介したい。

グトコフは1946年生まれ、独立系世論調査機関「レヴァダ・センター」の所長を2006年から昨年まで務め、豊富な世論調査データにもとづくロシア社会論を発表してきた。今回紹介するのは、彼の最新論文集『回帰する全体主義』（2022）の巻頭に収められた「ルサンチマン的ナショナリズム」である。初出は2014年のウクライナ危機勃発直後だが、再録にあたり加筆されている。よく知られているように、2014年のロシアによるクリミア併合やドンバスの分離派支援は、ロシア世論の高い支持を集

めた。なぜそのようなことになったのか、グトコフは政権側のイデオロギーと国民の側の心性の両面から分析する。

ロシア国民の心性分析は、レヴァダ・センターの初代所長ユーリー・レヴァダが中心となった論集『ありふれたソヴィエト的人間』（1993）以来のグトコフのライフワークだが、彼の描くその特徴は30年間ほとんど変わっていない。ペレストロイカの高揚が国家と社会の崩壊に終わったあと、ロシア国民は政治に対する無気力に覆われ、体制に権利を差し出す代わりに生活保障を得るという、権力とのパターンリズム的関係が根づいている。おのれの私生活にしか関心を抱かず、未来の展望ももたない。このようにアトム化した社会で、しかしナショナリズムが膨張してゆく。それは国民どうしのつながりをもたらし、市民社会の礎になるようなナショナリズムではなく、他者への不満、敵への警戒にもとづく、代償的・防衛的なナショナリズムである。人々が無意識下に抱いている国家・社会への不満が、ロシアに害をなす敵のイメージへと投影され顕在化するのだ。

挫折した理想のトラウマ、惨めな現状に対するルサンチマンが体制批判につながらないように、プーチン政権は外敵の脅威とロシアの過去を神話化してきた。邪悪な敵を撃退する偉大な国家という神話（そのクライマックスは第二次世界大戦である）は、人々のトラウマを慰撫するとともに、国家権力との一体化を促進する。そこでは国民がじかに国家に包摂され、中間領域としての「社会」（公共圏といってもよいだろう）が存在しない。

権力への潜在的な不満が外部の敵に振り替えられるという構造は、生活が苦しい層だけにみられるわけではない。外国嫌悪や移民差別は、むしろ富裕層や教養層のあいだに顕著だという。ままならない現実への不満や西側との落差は、そうした層のほうが感じやすい。このルサンチマンは権力の制御をときに超え、排外的なナショナリズムが権力批判と結びつくようになる。毒殺未遂事件や逮捕・収監が日本でも報じられた反体制運動家のアレクセイ・ナワリヌイは、民主派リベラルというイメージが強いが、もともとはそうした排外的なナショナリズム運動に関係していた。プーチン政権がウクライナのユーロマイダン運動に感じた脅威も、それがウクライナ・ナショナリズムと反体制の融合であったからだ。このような可能性は孕んでいるものの、ロシアの政権はルサンチマン的ナショナリズムをおおむね制御しつづけている。

以上がグトコフの論文の骨子である。今回のウクライナ侵攻がルサンチマン的ナショナリズムにどの程度支持されるのか、現状では見通せない。3月22日に公開されたYouTubeチャンネル「民衆の政治（Популярная политика）」の動画でグトコフは、クリミア併合時のような愛国感情の高まりはみられない一方、無気力な順応主義は広がっていると述べている。今後、経済制裁によって国民の主要関心である生活が深刻に逼迫したとき、邪悪な敵のイメージだけで政権が国民のルサンチマンをかわせるのかは未知数だし、あるいはグトコフが望みつつけているように、ルサンチマンを脱却した市民運動が形成されるきっかけに今回の戦争がなる可能性も皆無ではない。とはいえグトコフの論文が明らかにしているのは、ルサンチマン的ナショナリズムの担い手が、地方に住んでいる無知で無辜の人々といった像には集約できないことである。その担い手には、政府が流布するのは異なる情報に接することのできる人々が多く含まれている。彼らは騙されているというよりは、トラウマやルサンチマンを癒すため、嘘を信じたくて信じている。グトコフにしたがえば、それは他者に責任を押しつける小児的な心性であり、自立した市民の姿とはおよそかけ離れたものだ。

こうしたグトコフの分析に関しては、ソ連以来の古いロシア国民像に依拠しており近年の変化を捉えられていないといった批判や、分析のベースになっている素朴なりベラリズムへの批判がありうる。しかしそうした批判より問われるべきは、これは果たしてロシアに特殊な心性なのかということだろ

う。自分の私生活にもっぱら関心があって政治に対する責任意識がないという人は、世界中のどこであれ多数派ではないかという気もするし、ルサンチマンを外敵に振り向けることもありふれている。近年の世界で高まるポピュリズムに、ルサンチマン的ナショナリズムをみてとるのはたやすい。

だから私たちは想像してみなくてはならない。もしも日本のテレビニュースの生放送中に、同じメッセージを——ロシア語部分は日本語で書いて——掲げたロシア人が乱入してきたならば、私たちはそれをどのように受けとるのか。あなたたちがみているニュースを信じてはいけない、ロシア人は戦争をしたくないのだ、戦争をもたらしたのは西側なのだ、という訴えにその意味は変化する。その主張を私たちは認めないだろう。それはもっともなことである。だがそのとき、私たちはロシアの「あなたたち」と同様に、自国の報道をただ信じたくて信じているのではないといいきれるだろうか。このように問いなおすことによってのみ、私たちはオフシャンニコワの勇気に応えることができる。

執筆者について——

乗松亨平（のりまつきょうへい） 1975年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科准教授。専攻、ロシア文学・思想。小社刊行の主な著書には、『リアリズムの条件——ロシア近代文学の成立と植民地表象』（2009年）が、訳書には、ミハイル・ヤンボリスキー『デーモンと迷宮——ダイアグラム・デフォルメ・ミメーシス』（共訳、2005年）、ヤンボリスキー『隠喩・神話・事実性——ミハイル・ヤンボリスキー日本講演集』（共訳、2007年）がある。

【特集 ウクライナ侵攻の深層】

「歴史の発火点」としてのウクライナ

——なぜプーチンは侵攻したか

武隈喜一

ロシアのプーチン大統領は2月24日、ウクライナへの「特別軍事作戦」を宣言した。NATO入りをめざすゼレンスキー政権を転覆し、ウクライナを「中立化」してロシアが占拠しているクリミア半島の領有とウクライナ東部の親ロシア派支配地域を独立国家として承認することを求める、という不当な要求を掲げ、19万の兵力でウクライナに侵攻した。これまでの1カ月間で、300万を超えるウクライナ人が国境を越えて避難民となり、正確な数がかねないほどの多くの民間人がロシア軍の不法な攻撃の犠牲になっている。わたしたちが目にしてきているのは、1942年のスターリングラードでもなければ、1945年のベルリンでもない。映像で映し出されるアゾフ海沿いの港湾都市マリウポリや東部の工業都市ハリコフの、ミサイルや砲撃によって瓦礫となった廃墟は、わずか1カ月前には、春を待つ公園で子供連れが家族が休日を過ごす穏やかな町だった。

アメリカのジャーナリスト、エドガー・スノウは1945年、独ソ戦争によって荒廃したウクライナを訪れ、こう書いた。「この巨大な戦争はなによりも、ウクライナの戦争であった。これほど町や産業や農地、そして人間が傷ついたヨーロッパの国はひとつとしてない」。

そしていま、ウクライナではまたしても、町や産業や農地や、そして何よりも人間が深く傷ついている。

第二次世界大戦は、ナチス・ドイツとスターリンのソ連による、ウクライナの豊饒な大地と資源と労働力をめぐる戦争だった。ヒトラーはウクライナについてこう言った。「〈上級民族〉があまりに狭い大地の上で苦悩しながら存在しなければならないというのに、文明に何の貢献もしない、わけのわからぬ有象無象が世界で最も豊かな広々とした土地を占めている」。「ウクライナを征服することによって、われわれは、わが民族の次の百年の生存権を保障することができるのだ」。

ソ連は、ナチス・ドイツとの戦争の死者数を、戦死者900万人、民間人死亡者1400万人から1700万人としている。付け加えておかなければならないが、これは「ロシア人」の死者数ではなく、「ソ連」全体の死者数だ。そしてスターリンは「対独戦争」を、「大祖国戦争」という名で呼び、ソ連邦諸民族の集団的記憶とすることで、歴史の共有という一体化を図ろうと努めてきた。事実、ソ連はナチス・ドイツとの戦いに国力のすべてを傾けた。

しかし、実際には、その死者の多くはウクライナ人であり、ウクライナとベラルーシに居住していたユダヤ人だった。「ユダヤ人居住地域 Pale of Settlement」に生活を制限されていたユダヤ人たちはナチスの侵攻によって、その場で銃殺されるか、多くがポーランド国内に作られた絶滅収容所へと運ばれていった。そして、スノウの言う通り、ウクライナの大地は何度も蹂躪され、ウクライナ人の死亡率は圧倒的に高かった。

ロシア革命直後にポリシェヴィキを悩ませたウクライナの民族運動は、スターリンによって1930年代にほぼ弾圧されたが、それでも戦争初期の混乱に乗じてウクライナ国家の独立を図ろうとした民族主義者たちは、ナチスの「協力者」として殺害された。共産党の方針に従わない者も、「ウクライナ民族主義者」のレッテルを貼られて殺害されるか、シベリアの強制収容所へ送られた。

ドイツとの戦場から帰ったウクライナの民衆は疲弊の極みにあり、戦争を率いた「偉大なる首領」スターリンのもとで「大祖国戦争」の勝利を祝い、「ソ連の歴史的一体性」の中に留まり続けた。しかしソ連時代もウクライナ共産党は常に民族問題に揺れ続けていた。

それはウクライナが、ロシアとは異なる独自の歴史を歩み続けてきたからだった。豊かな穀倉地帯のウクライナは、ロシア帝国、ポーランド・リトアニア公国、オスマントルコなどによって支配されてきたが、19世紀以降は、東のロシア帝国、西のハプスブルグ帝国、そして新興ドイツ帝国の間で常に侵略の脅威にさらされてきた。ウクライナ民衆の間に根付いた文化や言語や歴史認識は、けっしてロシアと同じではなかった。リヴィウを含む現在の西ウクライナは、1939年に結ばれたモロトフ・リッペントロップ秘密協定まで、実質的にロシアに属したことはなかったし、港湾都市マリウポリをはじめとするアゾフ海一帯も黒海沿岸も、18世紀後半まではオスマントルコ領だった。

20世紀初頭の地政学では、ウクライナは、ドイツとロシアという二つの文明の「闘争の地」とされていた。英国の地政学者マッキンダーは、東ヨーロッパとロシア南部を、世界制覇につながる「^{ハートランド}中核地帯」として「ユーロアジア」の名称を初めて使った。「中核地帯を制する者はヨーロッパを制し、ヨーロッパを制する者は世界を制する」というマッキンダーの言葉に触発されて、文字通りの「世界制覇」を企てたのがアドルフ・ヒトラーだった。

ロシア革命後に民族主義者の離反を防ぐため、ウクライナの民族性を重視せざるをえなかったレーニンも、歴史と文化が複雑に入り組んだこの豊かな地域が、世界史の重要性をはらんでいることを理解していた。だからこそソ連という中央集権的な統治機構に収めながら、1920年代にはウクライナ人の民族教育をうながしたのだった。1929年までウクライナ人の子供の97%はウクライナ語で教育を受けたと言われている。

第二次世界大戦の終結とともに、ともに戦争を戦った連合国は、欧米の「資本主義ブロック」とソ連、東欧の「共産主義ブロック」に分かれていくが、ヒトラーの「世界制覇」の夢が破れた後でさえ、戦後欧州の最大の懸案は「ドイツ問題」だった。

二度までも大戦の引き金となった「強国ドイツ」の復活を押しとどめ、自陣営に取り込もうとする激しい綱引きの結果、ドイツは東西に分割された。それはそのまま東西陣営による世界分割の試みだった。欧米諸国は西ドイツの再軍備を進め、1955年5月8日、NATO加盟を承認。ソ連が東ドイツを引き込んでワルシャワ条約機構が成立したのは、それからわずか6日後のことだった。

戦後米国のソ連政策をリードし、「封じ込め政策」という言葉を生み出した米国の外交官ジョージ・ケナンは、当初、ソ連の軍事的な脅威を強調していたわけではなかった。むしろ、ドイツや日本といった敗戦国への共産主義の政治的拡大を危惧していたのだが、ソ連の核開発とロケット開発が米国の予想を超えたスピードで進む中、両陣営はますます軍事衝突への懸念を強め、鉄のカーテンが世界を分けていった。

しかし、核軍拡競争の経済的負担に喘ぎ、硬直化した計画経済が国民生活を圧迫した結果、1991年12月にソ連邦が一挙に瓦解すると、ソ連を構成していた各共和国は独立し「国民国家」への遠心運動が始まった。だが、それぞれの国にはロシア系をはじめ他民族の住民が多く残ったため、「解体した帝国」は「民族、文化、言語」の複雑なモザイクとなって、各地で民族紛争が勃発。「民族、文化、言語」の記憶と紐帯、あるいは他民族への排除と憎悪は、共産主義イデオロギーよりもはるかに根深く複雑だった。

この時、「中核地帯」には空白が生じていた。

ソ連ブロックの崩壊によりワルシャワ条約機構はあっけなく解体したけれども、主要な敵が消えた

はずの NATO は、地域紛争の予防と平和維持活動を新戦略に掲げて生き延びた。その根底には、相変わらずロシアの強大な核戦力への恐怖と猜疑心があったことは疑いない。

こうしたなかで、影のように立ち現れてきたのが、NATO とロシアの間に位置する「中核地帯」ウクライナだった。ファシズムと結びついたマッキンダー流の地政学概念をどんなに批判しようが、NATO の東方拡大によってウクライナが再び「中核地帯」となったことは否定できなかった。

ポーランド、チェコ、ハンガリーの NATO 加盟が決まった 1998 年、かつて「封じ込め政策」を提唱したケナンは、この決定を厳しく非難した。「これは新たな冷戦の始まりだ。ロシア人はいずれ強く反発するだろう。それは確実に彼らの政策に影響を及ぼす」。

しかし、バルト三国や東欧諸国はわれ先にと NATO 入りを目指し、体制の移行に苦しむロシアを尻目に、欧米は加盟を認めた。

1999 年の NATO 軍によるユーゴスラビア空爆はロシアにとって衝撃だった。国連安保理に諮ることもせず、ロシアと協議する姿勢を見せることもなく、米国主導で始められた NATO 軍によるユーゴ空爆は 78 日間に及んだが、ロシアは恐怖と疑念の中で破壊されていくスラブ民族の町を見守るしかなかった。

その直後にロシア大統領に就任したのがウラジーミル・プーチンだった。プーチンは弱体化した帝国がさらされる屈辱と危険を痛感していた。

膨大な石油と天然ガス、そして 1998 年の通貨危機後のルーブル切り下げによってロシア経済は 2000 年代には力強い回復を見せる。自信を深めたプーチンは、欧米との協調路線を捨て、「帝国ロシア」の復活へと舵を切った。ケナンの抱いていた懸念が現実のものとなった。

プーチンにとって、「民主主義」や「個人の自由」や「多様性」などという虚飾にまみれた欧米の価値観はロシアを墮落させる邪悪な虚偽（フェイク）以外の何物でもなかった。資本主義というシステムへの移行に苦しんでいたロシアに、「自由」と「民主主義」の欧米諸国はいったい何をしてくれたというのか。欧米の墮落しきった文化に汚されていない「無垢な文明としての偉大なロシア」こそが、歴史を作る——。プーチンが同性愛者を「悪魔主義者」と罵って犯罪者呼ばわりし、社会の多様性を否定する源泉もここにある。

プーチンに圧倒的な影響を及ぼしたのが、不遇の亡命哲学者イヴァン・イリインの思想だった。イリインはロシア革命後ドイツに逃れ、暴力を使ってポリシェヴィキを倒そうとし、ドイツのファシストたちと手を結んだ。イリインによれば、ロシアは地理的な国家ではなく「魂の在処」ともいうべき霊的な存在だった。そして霊的に純粋なロシアは墮落した欧米の価値観と戦う聖なる文明だった。

プーチンは年次教書演説で何度もイリインを引用しながら、ロシアは「カルパチア山脈からカムチャツカ半島まで」、ロシアという同じ文明を共有する人びとが散らばる大地のことであり、近代国家を超えた「ユーラシアの偉大な文明」なのだ、と主張した。そしてウクライナ人とは「もうひとつのロシア人集団」にすぎず、国家としての地位については議論の余地もない。ウクライナをロシアから引き離そうとする NATO や EU（欧州連合）諸国は、ロシアを抹殺しようとしているのであって、文明を同じくするウクライナはロシアとともに永遠に「ユーラシア文明圏」にあるべきものだ、と強調した。

だからこそ、プーチンは、ウクライナが 2008 年に NATO 加盟の意思を表明し、NATO 側がその準備に同意したことに対して憎悪をあからさまにしたのだった。しかしプーチンのこうした主張に、欧米諸国はほとんど耳を傾けなかった。2013 年には EU はウクライナを含む旧ソ連諸国に対して連合協定を提案した。プーチンは、ウクライナのヤヌコヴィチ大統領に圧力をかけ、調印を拒否させた。

ロシアの干渉に抗議し、ウクライナの人びとはキエフ中心部の広場を埋め尽くした。ロシアから送

り込まれた治安機関が発砲し流血の惨事となったが、ウクライナの民衆はヤヌコヴィチを追い落としした。この行動をも「欧米が背後で操った反ロシアの陰謀」だとみなしたプーチンは、クリミア半島を急襲してロシアに併合した。この軍事行動も「国境線の変更」ではなく、ロシアの固有の領土クリミアを取り戻し、「ユーラシアの文明」の一体性を防衛するための行動だとプーチンはうそぶいた。

しかしながら、こうしたウクライナ国民の自発的な反ロシアの抵抗運動こそ、「ウクライナ人などというものは無いのだ」というプーチンの主張を真っ向から反証するものだった。

外国からの干渉を許さず暴力に立ち向かい、みずからの意思によって未来を選び取っていかうとするウクライナの民衆は、民主主義を目指す新たなウクライナの姿であった。

それは大国の間で「中核地帯」として蹂躪され続けた歴史を経て、そして1991年に独立を果たしてから30年あまりの経験の上に、ウクライナ国民が選び取った道だと言っていいだろう。

今年2月、19万の兵力によってウクライナに侵攻する直前、プーチンは「ウクライナなどという国はもともとないのだ。ロシア革命後にレーニンやスターリンの、民族主義者への譲歩によって作られたのだ」と演説した。おそらく「ウクライナとの歴史的一体性」を「帝国ロシア」の遺産として当然のことのように受け取っている多くのロシア人にとっては、このプーチンの演説は違和感のないものだっただろう。自由な報道が制限され、政府のプロパガンダだけが既存のメディアで流通する中、ロシアの人びとは、「帝国」意識の中でそれを受け入れた。

しかし、ウクライナの人びとは、ロシア軍の戦車を前に、銃をとることを選んだ。侵攻から1カ月が経ち、ウクライナ軍の激しい反撃を受けたロシア軍は、主要な軍事目標を首都キエフ陥落から、ウクライナ東部の親ロシア派支配地域の占領に切り替えざるをえなくなっている。

ウクライナの人びとは、民族の独自の歴史を「ユーラシア文明の一体性」という「神話」にすりかえたプーチンの欺瞞や、侵略戦争を支持するロシア人の帝國的な歴史認識に照準に当て、屈従と暴力のない未来を目指して戦っている。

執筆者について――

武隈喜一（たけくまきいち） 1957年生まれ。元テレビ朝日モスクワ支局長、元テレビ朝日アメリカ社長。小社刊行の主な著書には、『[黒いロシア 白いロシア――アヴァンギャルドの記憶](#)』（2015年）、『[マンハッタン極私的案内](#)』（2019年）、『[絶望大国アメリカ――コロナ、トランプ、メディア戦争](#)』（2021年）がある。

中之島美術館 ——愛される黒のゆくえ

加藤有希子

40年近い準備期間を経て、2022年2月2日にオープンした大阪中之島美術館。私は2022年3月6日にこの美術館を訪れた。真っ黒な巨大な箱が、ヤノベケンジの白い猫に伴われて、現代的な中之島のオフィス街に立つ。この黒い建物には賛否両論の意見が渦巻いているのを知っているが、私は一目でその姿に魅了された。その充実したコレクションゆえ、建築の外観について込み入った議論はされていないようだが、私は色彩論研究者として、この美しい黒についてここで語ってみたい。

黒というと私たちはどういうイメージを抱くだろうか。歌手のジョニー・キャッシュは1971年に発表された「黒い服の男 (The Man in Black)」で「なぜ俺がいつも黒を着てるかって？ [……] 俺は貧しくて打ちのめされた奴ら、希望もなく、街で腹をすかせた奴らのために黒を着るんだ。俺は罪を償うために刑務所にいる奴ら、時代の犠牲者である奴らのために黒を着るんだ」と謳う。

ジョン・ハーヴェイも『黒の文化史』(2013)で述べているように「黒」という色は単なる色調ではない。光学的な意味を超えて「黒い服の男」が世界の絶望や貧困や犠牲を着るように、黒には倫理的な悪と不幸の印象がつきまとってきた。

そのような色の倫理観が生まれた理由は、必ずしも一元化できないが、ひとつには古代世界にはなかった「罪の黒さ」がキリスト教により強調されるようになったことがある。4世紀のアウグスティヌスやヒエロニムスが黒さの中に罪を見出したように、その比喩が拡大して現実世界にも広まり、エチオピア人などの「黒人」も「罪深さの具現」とみなされるようになった。それから1500年以上経った今も、黒人差別は表に裏に横行しており、「黒」に対する忌避の感情は容易に消えることがない。

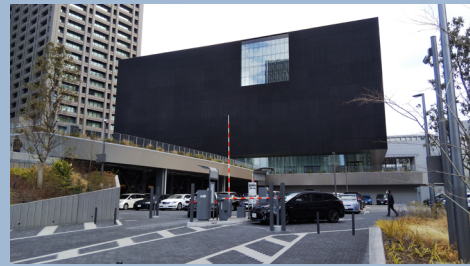
ギリシャ時代から抑鬱の原因とされた黒胆汁に始まり、2010年代に巻き起こった「暗黒啓蒙 Dark enlightenment」まで、黒と闇の比喩は、現実世界の苦悩や争いと随走してきた。革新的なルドルフ・シュタイナーですら、「黒は生命と無縁であり、生命に敵対」と喝破するのだ。

このような黒に付随する暗い物語があつてこそ、1970年生まれの建築家、遠藤克彦が設計した漆黒の中之島美術館は驚くべきものだ。これは妹島和世と西沢立衛のSANAAが設計し、2004年にオープンしたガラス張りのホワイトキューブの金沢21世紀美術館を裏返したような美術館だ。

金沢21世紀美術館はその透明性と丸い形で人々を引き寄せ、そして開放する。しかしまったく逆のすべての光を吸収する真っ黒な四角い中之島美術館は、同じように多くの人を集め、そして吐き出す。私がこの黒い美術館を訪れて最も印象的だったのは、その客層の広さと人数の多さだった。老若男女が溢れ、知的な客層もいれば、デートの若者もいる、年配者や子どもなども多い。今、2022年、コロナ禍やロシアを発端とした戦争を経て一層厳しくなった日本社会に、ここまでの広い客層を惹きつける知的で美的な娯楽がいまだにあることは、私たちの希望の光だろう。

ハーヴェイは「黒は白よりも強烈な存在感があるとも言える」と語っている。そして小町谷朝生は『色の不思議世界』(2011)の中で、白色が面であるのに対して、「黒色についてさらに言わねばならぬことは、われわれが日常に認める黒色は、ある種の深さを保有している」と述べている。大阪中之島のメタリックな新興のオフィス街に黒く穿たれたブラックホールは、その吸収力よろしく、その深い懐に、明るい陽気さで、人々を集め、そしてまた解き放つのだ。

マティスは「黒は力である」と言った。そして小町谷も言うように、黒は燻蒸してこそできる「人工色」であり、人為の力である。2022年のこの厳しい時代にあって、暗い歴史を裏返すように、「愛される黒」に変貌した中之島美術館。隔離やヘイトや戦争など、人為に対して疑念を向けざるをえない暗い時代状況の中で、今一度、人間というものへの信頼を回復できるか。中之島美術館の「新しい黒」への期待は大きい。



執筆者について——

加藤有希子（かとうゆきこ） 1976年生まれ。現在、埼玉大学准教授。専攻＝美学，芸術論，色彩論。小社刊行の著書には、[『クラウドジャーニー』](#)（2021年）がある。

出版よもやまばなし

——出版界にもしウクライナ国民の何万分の一ほどの血を流す勇気があれば……

高須次郎

先日、新聞社の記者が Amazon のことなどを取材したいのでと小社を訪ねてきた。話を聴いてみると業界紙の『文化通信』3月11日付が「〈アマゾン 紙書籍で最大 50% 値引き販促を計画 出版社がポイント還元率設定〉」という記事を報じているが、これは再販契約違反ではないか」「大幅ポイントサービスに反対して、Amazon に出荷停止している貴社としてどう思うか？」というのである。

アマゾンジャパンが、紙書籍が最大で実質 50% 値引きとなる販促企画を複数の出版社に案内していることが本紙の取材でわかった。

アマゾンジャパン Books 事業部の企画で、「紙書籍ポイント還元プロモーション」と題し 4 月 22 日から 29 日まで実施する。出版社は紙の書籍であればすべてのジャンルのタイトルを申請することができる。

アマゾンが本体価格を値引きするのではなく、購入者が Amazon.co.jp 内の買い物で利用できる Amazon ポイントで還元する形をとる。ポイント付与率は出版社がタイトルごとに 10% から 50% のあいだで 5% 刻みで設定する。アマゾンはポイント 1% 分を負担する。

アマゾンジャパンと取引のある出版社に送られてきた内容では 10% からではなく 30% からが正確なところのようだ。しかもこの手の企画は以前から毎月のように行われていて、何も目新しいものでもなく、「複数の出版社に」ではなく、取引出版社に手当たり次第に案内しているようだ。Amazon の依頼メールには「秘密情報」「口外厳禁」で洩らしたら「秘密保持契約違反になる」などと書かれているので、メールを送られた出版社がビビって口外していなかったのかもしれない。

再販契約つまり正確には再販売価格維持契約という。小売店の販売価格をメーカーが拘束できるというのは自由経済に反することであるが、独禁法の例外規定で、雑誌・書籍や新聞などが許されていた。アメリカの規制緩和要求の一つに再販制度の廃止があり、公取委は廃止に躍起となったが、業界の反対運動によって、これらの品目は文化の普及を担っており、自由競争も広く行われ、消費者利益を害していないので制度として残そうということに落ち着き、2011 年に最終的に存置が確定した経緯があった。

アマゾンジャパンが大幅なポイントサービスを開始したのは 2012 年で、学生向けの「Amazon Student ポイント」がはじめて、有料会員向けサービス「Amazon プライム」にも拡大させていった。再販制度で、一般書店には価格拘束をしておきながら、アマゾンの値引きである大幅ポイントサービスを認めれば書店が潰れてしまう。アマゾンではポイントサービスに送料無料で本が入手でき、書店ではポイントサービスはない。あっても 1 から 3%。これでは公平な競争にならない。

そのときこれに異議を唱えたのが、小社が当時会長をしていた日本出版者協会（以下、出版協）だ。紙書籍で大幅なポイントサービスを続けるアマゾンジャパンに対し、再販契約に違反するポイントサービスの中止を求めてきたが応じないため、2016 年から小社や再販委員長だった水声社と現会長の晩成書房は同社に対し出荷停止に踏み切って現在まで続けている。この 5 月で 8 年目を迎える。そ

んなことをすれば会社が潰れるといわれたがそれほどでもなかった。ほとんどの出版社はアマゾンの言いなりになった。大手出版社や老舗出版社で組織する日本書籍出版協会（以下、書協）も再販制度を守ると言いながら何ら手を打たなかった。そのころはアマゾンの値引きも10%であったが、いまや50%である。

この間、何が起こったのだろうか？ 数字を見ておこう。日本の出版物の販売額は、2000年に2兆3966億円だったものが、2010年1兆8748億円、2020年には1兆6168億円に減少した。うち電子書籍が3931億円なので、紙の出版物は1兆2237億円となり、20年で35%の減少したことになる。紙の書籍で見ると、2000年に9706億円だったものが、2010年8213億円、2020年6661億円に減少し、20年で32%の減少であった（出版科学研究所調べ）。

書籍の新刊点数は、ピークであった2013年の8万2589点から20年には6万8608点と急減した。出版社数も2001年の4424社から2010年3815社、2020年2907社にまで減った。20年で約35%減である（出版年鑑ほか）。倒産廃業をしないまでも、知らない間に大手出版社や印刷会社の子会社になって生き残っている老舗出版社も結構ある。

書店数は2000年に2万1495店あったが、2010年には1万5314店に減少し、2020年には1万1024店となり、うち店舗を有する書店は9762店で遂に1万店を割った。20年で半減したことになる。14年からだけでも約3000店が消えた（アルメディア調べ）。

こうした数字の原因は、昔から言われていた活字離れから人口減やスマホの普及などさまざまにある。なかでも書店数の減少が著しいのはなぜなのか？ 1990年代からの大型書店の進出が中小書店の減少に拍車をかけ、出版不況、とりわけ雑誌の売上げの減少が決定的であった。その大型書店、1000坪以上の超大型書店の拡大も、2005年51店から2015年には101店とピークを迎えたが、その後は減少に転じた（JPO調べ）。大型書店を積極的に展開しロングテールの専門書の販売に力を入れていたジュンク堂書店が09年にDNPの傘下に入ったのは象徴的な出来事であった。その原因の一つにアマゾンの躍進があった。

2000年に日本に上陸したアマゾンは、2011年には本の売上げ1920億円（週刊東洋経済推計）と躍進し売上げトップとなった。2012年からは学生向けのポイントサービスを皮切りに送料無料、大幅ポイントサービスを展開し、他の様々な商品と組み合わせた各種サービスで読者の購買構造まで根こそぎ変えてしまった。地方どころか首都圏の駅前に書店がないことも驚くにあたらない。大型書店ばかりか、いまや大型ショッピングモールも閉鎖される時代になってしまった。複数の出版取次店も倒産廃業し、アマゾンと直取引のない出版社を見つけることも難しくなった。

こうしたアマゾンの躍進の背景には、同社のIT企業としての優秀さもあるが、一方で劣悪な労働環境、出版社などの取引先の取引条件の厳しい引き下げ、消費税・法人税の回避といった、GAFAT特有の強引な手法がある。出版協が当時問題にした消費税・法人税の回避も、遅まきながらのGAFAT規制で支払うようにはなったが、後の祭りである。

ポイント問題については、再販制度を守るうえでもっとも責任がある書協の対応に最大の問題があった。書協は1998年から年2回バーゲンブックフェアを書店で開始した。公取委が再販制度の弾力運用をせよと要求するので、仕方なく期間限定でやるのだと最初は言い訳していた。ところが2003年から「出版社共同企画『期間限定謝恩価格本ネット販売フェア』」を読者直販ではじめ今日に至っている。割引率は45%である。発行後一定期間経過した本について自由価格にすることは時限再販といって許されることになっているが、その時限再販本をフェア終了後にもとの定価に戻すこのやり方は、現行再販契約から考えても違反行為といえる。冒頭のアマゾンの『紙書籍ポイント還元プ

ロモーション』は、この書協の『期間限定謝恩価格本ネット販売フェア』をまねたものに過ぎない。「ネット上でなら半額で新刊書籍の購入が可能、一方、書店を通した注文は『定価販売』という。『一物二価』の最たるものである。しかも、一定の期間が過ぎたら再販定価に戻すという。ご都合主義の时限再販は、業界を混乱させるばかりである。こうしたことがまかり通ってしまうと、『定価』に対する信頼などもの見事に素っ飛んでしまうのではないのか。公取の指導というよりも、『単なる出版社エゴによる在庫一掃セールではないのか』と言っては言い過ぎだろうか」（『2007年出版流通白書 再販制度弾力運用レポートX』出版流通改善協議会編）。これは書店組合の日書連再販研究委員長岡嶋成夫氏が、書協の『期間限定謝恩価格本ネット販売フェア』を批判した一文である。アマゾンの冒頭企画にも当てはまる。

今アマゾンで本を買おうとすると、¥表示なので定価が分からない。マーケットプレイスでも中古本に混じって出版社や書店が新刊を出品している。出荷停止している小社の本もどこからか仕入れて売っている。何でも売っているのがアマゾンの意地なのだろう。定価より高く売られていたりして、安いと思って買ったのにと、読者から出版社に苦情が来ることさえあるという。読者は同じものなら値段は何でも安い方が良いのは当たり前だが、それが行き過ぎるとルールがなくなってしまう。

出版界はアマゾンの一人勝ちで、ますます書店は潰れ、出版社は様々な要求で苦しめられている。版元が自己防衛のため本の値上げをすれば結局、読者は損をし、著者もますます本を出すことが難しくなり、印税をまともに払ってもらえなくなる。

もはや出版界は、アンフェアで何でもありの無法地帯と化しつつある。手遅れの感すらする。しかしいまこそ出版社に求められているのは、こうした企画をボイコットし、再販制度を破壊するアマゾンとは取引を止め、フェアな姿に少しでも戻そうとする努力ではないだろうか。出版界にもシウクライナ国民の何万分の一ほどの血を流す勇気があれば、なんとかなるはずである。

執筆者について――

高須次郎(たかすじろう) 1947年生まれ。緑風出版社長。主な著書に、『再販／グーグル問題と流対協』(2011年)、『出版の崩壊とアマゾン』(2018年、いずれも論創社)などがある。

【連載】

友としての本

——本棚の片隅に1

小林康夫

本棚から一冊の本をとり出す。

全面、赤いカバーにつつまれた200頁あまりの本。白抜きのタイトルには『作家、学者、哲学者は世界を旅する』とある。ミシェル・セールが2009年に上梓した原書を清水高志さんが訳して、水声社から2016年に「人類学の転回」叢書の第5弾として刊行されている。

*

この本（訳書）をはじめて読んだのがいつだったのか、記憶にない。だが、まちががなく、これは、ここ数年、わたしにとっては「友としての本」であったし、いまでもそうだ。

「友としての本」というのは、愛読書とも少しちがう感覚をもつからだ。この本がたまらなく好きで愛読しているというのではなくて、「そうか、やっぱり君もそう思うんだな、同じようなことを考えるんだね、だから、この方向でいいんだよね？」と、ひとり勝手にセールさんに語りかけて、ひそかな「連帯」を確認させてもらう、そのための本なのである。

となれば、わたしだって少しはフランス語が読めるんだからと、3年くらい前だったか、パリの書店で原書も買って見た。こちらは白い表紙で、大文字は使われていなくて、ただ黒で「écrivains, savants et philosophes font le tour du monde」とタイトルがある（著者の名前は赤）。はじめの無冠詞複数形三つの並列のニュアンスはなかなか日本語にはならないが、まあ、わたしみたいな者だって、このどれかには入るんじゃないか、と思えば、「そうそう、わたしもまた世界を旅するのさ」と声をあわせることができるような気がしてくる。le tour du monde——ぐるりと世界一周。いや、まちがえてはいけませんが、豪華客船に乗って旅に出るようなことではまったくなく、人間にとっての世界——この「球」（多元性）をぐるりとまわる。見えないリアリティの次元（複数）を、——「転回」だ！——ぐるっとまわってみせることにほかならない。

*

でも、こんな勝手な「演出」ができるのも、——たった一度だけとはいえ——ミシェル・セールに会ったことがあるからかもしれない。1991年6月6日、日本フランス語フランス文学会の大会が東京大学の駒場キャンパスで行われ、セールさんが「第三教養人」Le Tiers-Instruitと題した講演を行った（石井洋二郎さんによる邦訳が雑誌『ルプレゼンタシオン』002号に掲載されている）。それは、メリメの「カルメン」を題材にして、科学と文学との分岐点、その〈源〉sourceにとどまることが真の〈冒険〉であるような「第三の地点」を高らかに断言する講演であったが、わたしは、学会の渉外委員かつ駒場の一員として、セールさんをお迎えする役をつとめた。いまでも印象が強いのは、かれの南仏（Midi）のアクセント。そのなかには、なにか、わたしの知っているフランス語の感覚とは違う「もうひとつの青空」のようなものが感じられた。とてもフランクで明晰な人だった。それまでにも、わたしはか

れの「Hermès」シリーズの何冊かは読んでいたのだが、わたしが馴染んでいたフーコー的、あるいはデリダ的、つまり（なんと呼ぼうか？）「条件法的」あるいは「接続法的」思考とは異なる「もうひとつの哲学」がそこにはあった。

当時は、そのシンプルな「明るさ」を横目で見ながら、傍らを通りすぎただけだったが、この『作家、学者、哲学者は世界を旅する』を手にしたら、わたしの「旅」の途中のその場が、不意に、戻ってきた、と言ってみようか。

*

だが、『作家、学者、哲学者は世界を旅する』そのものが、じつは、他者が書いた本に対して、それが「友としての本」であることを告げる本である。その本とは、文化人類学者のフィリップ・デスコラの『自然と文化を越えて』——そして、これも、2019年に水声社から小林徹さんの訳で出版されている。なんと600頁以上の大冊である。そして、これこそ、「人類学の転回」と名指されているこの水声社の「赤」の人類学シリーズの要となる著作であって、ここでは、人類の「存在論的転回」が思考されているのだ。

乱暴を承知で全体の見取り図を数行でまとめてしまえば（友よ、ゆるせ！）、次のようになる。

レヴィ＝ストロースの文化人類学を受けて、デスコラは、人類の存在のあり方を、大胆にも、

- ・アニミズム
- ・トーテミズム
- ・ナチュラリズム
- ・アナロジズム

の四つのパターン（原型）にまとめた。文化現象の奥に、四つの基本的な存在論的枠組みを見通したということになる。そして、そのように、アニミズムやトーテミズムまでを含めて、人間の「存在」の根源的あり方を再認識することにおいて、存在論を、たんなる抽象的な普遍性としての「人間存在」の存在論ではなく、「人類」という根元的に歴史的な「存在」の存在論へと拡張深化させる方向を見出した。それを受けて、ミシェル・セールは、その図式を自分自身に適用し、南仏に生まれて、そこから世界を旅した自分自身を振り返りつつ、自然と文化を横断する「存在」という本質的な「旅」について思考しているのだ。

そして、今度は、それを読むわたしが、かれに向かって「やっぱり君もそう思うんだな」とそっと呟く。

*

というのも、わたし自身もまた、まったく別の途を通して、四つの存在論的図式を考えはじめていたからだ。いまから7年前、2015年に東京大学を定年退職したときの「最終講義」で、わたしは、19世紀の数学者のハミルトンが定式化した四元数 Quaternion を用いて四元的存在論のアイデアをぶち上げた。そして、それを鍵として、これまでのディコンストラクションの思考から、いまや、リコンストラクションの思考へと転回しなければならないと宣言した。わたしに残された時間で、それを、少しでも進めたいとわたしは言った。

だが、道は遠い。なかなか先の展望はひらけてこない。四元数は、実数 r と虚数 i, j, k からなる拡張された複素数である。わたしは、純粹に数学的な思考から出発して世界の次元の拡張を考えていた

のだが、そこに文化人類学から出発した世界の四元的認識が突き刺さってきたということになる。わたし自身もアニミズムのことは考えていた。ナチュラリズムは、わたしの図式では、自然科学が対象とする「数」による世界理解に対応した。デスコラがアナロジズムと呼んだ次元は、わたしにとっては、「実存」という「意味」の世界であった。だが、トーテミズムは、わたしにとっては、アニミズムの変型であり、それとは異なるある種の「絶対者＝法」の次元、数でもイメージでもつかまえることのできない、もうひとつの次元があるというのが、わたしのアイデアであった。

だから、デスコラ－セールの四元認識は、わたしの四元認識と重なってはいるが、一致はしない。そこには、やはり、文化人類学を基礎にするか、現代哲学を基礎にするかのちがいが反映されているのだろう。だが、どんな場合でも、そうした「ずれ」（ディフェランス）こそが、ひとを、新しいものへと導いていくのだ。

ここ数年ブロックされたままのわたしの貧しい思考を抱えて立ち往生しているときに、同じように四元的存在論を、しかし羨ましくなるほどのびやかに、エレガントに展開しているセールの語り口に、どれほど慰められただろう。

いつか、あんなふうに、わたしもわたしの「旅」を語るができるようになるのだろうか……友よ、一度しか会ったことのない、ミシェル・セールよ、ありがとう。

*

ミシェル・セールは2019年6月1日に亡くなった。88歳だった。

執筆者について――

小林康夫（こばやしやすお） 1950年生まれ。東京大学名誉教授。専攻＝哲学、フランス文学。小社刊行の主な著書には、『《人間》への過激な問いかけ――煉獄のフランス現代哲学（上）』（2020年）、『死の秘密、《希望》の火――煉獄のフランス現代哲学（下）』、『存在の冒険――ボードレールの詩学』、『宮川淳とともに』（共著、以上、いずれも2021年）、主な訳書には、ジャン＝フランソワ・リオタール『ポスト・モダンの条件』（1986年）などがある。

【連載】

分割－複製の彫刻

——コンテンポラリー・スカルプチャー 3

勝俣涼

ポーランドに生まれ、ドイツを拠点とするアーティスト、アリシア・クワデ (Alicja Kwade, 1979-) の彫刻やインスタレーションは、科学的あるいは数学的な関心を背景として、事物の存在のありよう、そしてそれらを認識する私たちの現実知覚のリミットに揺さぶりをかける。私たちの知っている現実とは、どれほど確かなものだろうか？ それは揺るぎない唯一の世界と言えるだろうか？ 私たちには観測不可能な、別の現実もまた実在しているのではないか？ クワデの作品経験は私たちを、このような問いに晒すだろう。

こうした操作はまず、複製や鏡の使用によって事物を二重化する手法に看取することができる。2016年のアート・バーゼルで発表された《Out of Ousia》(2016)は、こうした手法が存分に展開された一例だろう。コンクリート壁の片面から両面鏡、もう片面からはガラスのパネルが直角に突き出し、十字形の全体を構成している。

鏡面パネルの両側には石が置かれているが、片側のものは自然石、反対側のものはその自然石を元にしたアルミ製のレプリカである。レプリカの形態は、自然石のそれを反転させることで得られており、両者はパネルを挟んで、それら自体が互いに三次元の鏡像となるように対置される⁽¹⁾。つまり、鏡のスクリーン上とその「向こう側」で、最初はイメージとして、二度目は物体として、鏡像が反復されるのだ。この構成により、本作を周回する観客は事物の奇妙な容態を目にすることとなる。ある視点から眺めると、パネルの「向こう側」に覗いた石の一部が、「こちら側」の鏡面に映る石と連続的に融け合ってしまうのだ。そこに出現するのは、半ば物体であり、半ばスクリーン上のイメージであるような、状態を確定しがたい中間物である。それは同一の輪郭をめぐる喰い合う異種間の干渉が繰り返られる場であり、ゆえに「1つ」なのか「2つ」なのかを記述しがたい対象でもある。

ところで、鏡で仕切られた片側には、石と並んで、木の枝が壁に立てかけられている。鏡面に正対して見ると、当然ながら、枝とその反映像が「同じもの」として確認されるだろう。私たちが普段、鏡の前で自分の姿を確認するように。そして今度は、コンクリート壁の反対側へと、そのまま横跳びに移動してみる。手前には同じように木の枝が立てかけられているが、その奥にあるパネルは、鏡からガラスに置き換わったはずだ。しかしどういうわけか、そのパネルにはあいかかわらず、枝の「鏡像」が投影されているのだ。「向こう側」に向けて透過するはずのガラス面に、なぜ「こちら側」にある枝と「同じもの」が映っているのだろうか。交錯する、反映と透過、1つと2つ、「これ」と「あれ」、「ここ（こちら側）」と「よそ（向こう側）」。実はガラスの片側には、反対側の枝をコールテン鋼で複製した正確なレプリカが立てかけられている。

種明かしをされたからといって、少ない要素ながら精密に構成された事物と空間がもたらす揺動の感覚は、そう易々とは減じないだろう。複製や反映の関係に置かれた「対象」——《Out of Ousia》では、石や枝——を通じて、観客が経験している時空＝「世界」の確かさが揺るがされる。こう言ってよければ、「これ」と「あれ」の揺らぎが、「ここ」と「よそ」の揺らぎを誘発するような事態こそ、クワデ作品のラディカルな効果なのだ。

こうした手法は、2017年のヴェネチア・ビエンナーレで発表された《WeltenLinie》(2017)におい

てさらなる展開を示している。本作でもまた、反映と透過が交錯する構造が導入された。人がくぐり抜けられるサイズのフレームが入り組んだ空間に、石と木、そしてそれらのレプリカが配置されている。フレームのいくつかには鏡が嵌め込まれ、残りは骨組みだけのままになっているために、石と木は一方で鏡に反映する「単一の物体」へ、他方では対置された、似て非なる「2つの物体」へと、空間的かつ視覚的に引き裂かれる。この空間を通り抜ける観客は、現れたと思えば消え、消えると思えば残存する対象の不可思議な振る舞いに、既知の法則に基づいた現実感覚の確かさを揺さぶられることになる。

この揺動はさらに、このインスタレーションを舞台とするパフォーマンスによって加速する。ある人物が観客に紛れて、さりげなく展示空間を通行する。彼／彼女は、たとえば手に持っていたペットボトルを落とすといった、一見偶発的な動作をしたのち、その場から去る。しかしわずかな間を置き、またしても同じ人物が入ってきて、ふたたび同じ動作をする。その動作が、ものを落とすような「アクシデント」、すなわち連続的に繰り返されることが考えにくい出来事であるほど、異様なデジャヴュの感覚が強まるだろう。パフォーマーを務めたのは、同じ服装をした「双子」たちだった。つまり彼らは、反映され複製される石や木とパラレルな存在として扱われているのだ。しかしながら、彼らは観客たちに紛れている（パフォーマー自身が一人の匿名的な観客のように振る舞う）ために、その場に居合わせた観客自身もまた、この「繰り返し」の巻き添えとなる。つまり観客はパフォーマーと共に、同じ時間と場所、いわば「同じ世界」をやり直しているかのような感覚に襲われるだろう。

ところで、こうした時空の反復は、主観的には「ループ」として経験されるかもしれないが、見方を変えれば、主体もろとも世界が2つに分割－複製される事態とも言えそうだ。観客はこう自問するだろう。1番目の自分と2番目の自分は「同じ」なのか？ 自分は1人なのか、2人なのか？ クワデはこのインスタレーション／パフォーマンスの同年に、こんなことを書いていた。「私は空間と時間における短い出来事だ。ある場所を占める原子の束。今のところは、私がおの場所である。原子は近いうちに、新たな場所を探すだろう」⁽²⁾。私を構成していたのと「同じ」原子が「別の」場所において再編される事態は、同一性の概念を揺るがすに違いない。クワデ作品が招喚する、時空とともに分割－複製される身体は、「1つ」であり「2つ」、「ここ」であり「よそ」なのだ。

【注】

* アリシア・クワデの作品画像は、下記のウェブサイトで見ることができる（2022年3月15日現在）。
<https://alicjakwade.com/works> (Alicja Kwade)

- (1) 「エナンチオモルフィック」に対応する——右手と左手のように、同一ではないが鏡像関係にある——2つの対象を参照した先行例として、ロバート・スミッソンの《Enantiomorphic Chambers》(1965)がある。
- (2) Alicja Kwade, "The Great Attractor," *Art in America*, vol. 105, no. 10, November 2017, p. 47.

執筆者について——

勝俣涼（かつまたりょう） 1990年生まれ。現在、武蔵野美術大学助教。専攻＝美術批評、表象文化論。主な論考に、「運動－刷新の芸術実践——エル・リシツキートとスターリニズム」（引込線／放射線パブリケーションズ『政治の展覧会：世界大戦と前衛芸術』、EOS ART BOOKS、2020年）などがある。

【連載】

酒井順子から清少納言へ

——裸足で散歩 20

西澤栄美子

「首ちょんば」⁽¹⁾

「平家をぶつつぶせ」

2022年1月9日の三谷幸喜⁽²⁾脚本のNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』初回での北条時政（坂東彌十郎）の台詞です。これらの台詞は、すぐにツイッターでトレンド入りをし、現代語による大河ドラマとして賛否両論を巻き起こしました。異を唱える人の意見も理解できますが、筆者は、こうした台詞に新鮮な驚きを感じました。酒井順子⁽³⁾訳の『枕草子⁽⁴⁾』を読んだ時と同じ驚きでした。筆者も酒井と同じく、

春は、あけぼの。やうやう白くなり行く山ぎは、すこしあかりて、
紫だちたる雲の、細くたなびきたる⁽⁵⁾。

や、香炉峰の雪のくぐりなどは、中学校の古典の授業で、知っていましたが、『枕草子⁽⁶⁾』全編を読んだのは、酒井訳が初めてでした。日本文学全集7巻の上野千鶴子⁽⁷⁾による月報の、「清少納言という機知に富んだ才女⁽⁸⁾」に同一化できる書き手は、現代では酒井順子をおいて他にはない、という言葉に、筆者は同意します。ただし、この二人の共通点として挙げられる数々の事柄の内、「意地悪な目で周囲を観察しながら辛辣な筆を使い……」のくぐりについては、言語化するか（できるか）否かは別として、「意地悪」で「辛辣な」目は、千年の時を隔てたこの二人の随筆家に負けないほど、多くの女性が持っているものだと思います。

酒井が目目している数々の『枕草子』の文章の中で、一つだけ例を挙げてみます。それは、「匂い」に関する文章です。

七月頃、風が激しく吹いて雨などやかましく降る日、たいがいはすっかり涼しくなっているのに扇も忘れてる時に、汗の香がほんのり漂う綿入れの薄い着物をしっかりかぶって昼寝をしている気分はもう、最高⁽⁹⁾。

『枕草子 REMIX⁽¹⁰⁾』で、このくぐりについて酒井は次のように解説しています。

雨が降って、湿度の高い晩夏、綿衣をひっかぶれば、湿度に溶けだした汗の匂いに包まれる。その時の快感はおそらく、幼児が自分の指をしゃぶりながら眠る時と同じようなものであり、昼寝から目覚めた時の寝汗すら心地よいものだったのではないかと、私は思うのです⁽¹¹⁾。

『枕草子』には、かぐわしい薫物への記述と並んで、自分の汗の匂い、牛車を牽く牛の腰や尻に廻してある紐の匂いなど、生き物の放つ臭気に惹かれるという記述があることに酒井は共感し、「高級な香水や石鹸の香りには決して反応しないような生理の奥底の部分、それは刺激するのです⁽¹²⁾」と

書いています。

また、酒井は清少納言の職場(?)が、女子校の雰囲気を持つと述べています。後になって知りましたが、筆者は小学校の途中から高校卒業まで酒井と同じ学校の出身で、女子校の「のり」、「独立心」、独特の「楽しさ」、「わずらわしさ」、気に食わぬものへの「容赦のなさ」を思い出しました。酒井は、それらを『枕草子』に読み、自身が辛辣な、先生や友人への批評を書いて、こっそり授業中に回覧し合ったりした事とを、重ねあわせています。

酒井はまた、携帯メールでのやり取りと、平安時代の貴族たちの、美しい紙に季節の花を一枝添えての和歌のやり取りとの関連も述べています。そのくだりを読んで、筆者は、2000年代初頭のインターネット・ブログによる、連続同人小説⁽¹³⁾を思いました。当時、筆者が毎日更新を楽しみにしていたのは、SMAPのメンバーを主人公にした、西洋中世の騎士物語風の同人小説で、実像はどうあれ、当時、SMAPの一人一人には、はっきりした個性がメディアによって作られ、ファンによって承認され、ほぼ「公式」化されて、それをもとにした人物像や行動、台詞が物語を展開させるというものでした。こうした、ある種の二次創作は、当時ネットには無数に存在し、読者は、なんとなく知っている虚実の狭間の主人公と物語世界を、見知らぬ無数の同好の士と共有していました。当時、これは『源氏物語⁽¹⁴⁾』が書かれ、その写本を、菅原孝標女⁽¹⁵⁾が夢中になって読んだような、半ば閉ざされた濃密な世界の読書体験にも通じるのではないかと、筆者は思っていました。もちろん、ブログの俗っぽい同人小説や、スマホでの文法も無視したような無茶苦茶な軽いやり取りや、よりに選った美しい紙や花の一枝の代わりのお仕着せのスタンプを添えたラインメッセージは、所詮、「下衆」の所業でしかありませんので、平安時代の貴族たちの雅な世界とは、比べようもありませんが。それでも、酒井訳の『枕草子』が、千年の時を超えて、筆者の共感を改めて呼び起こしたように、現代の人々の営みや想いの中に、平安時代と時を超えた繋がりを見出すことは、読書がもたらす発見であり、喜びではないでしょうか。

【注】

- (1) 斬首を表すことば。1970年代にトンボ鉛筆1ダースを買うともらえるドリフターズの顔のついた玩具で、CMソングで流れ、子供たちに流行した。
- (2) 三谷幸喜(1961年—)。
- (3) 酒井順子(1966年—)。
- (4) 『枕草子』(1002年?)。平安時代中期に中宮定子に仕えた女房、清少納言(966年?—)の随筆。
- (5) 『枕草子』第一段冒頭。
- (6) 『枕草子 方丈記 徒然草』(「池澤夏樹個人編集 日本文学全集7」)河出書房新社、2016年。
- (7) 上野千鶴子(1948年—)。
- (8) 注(6)の月報「キャスティングの妙」。
- (9) 『枕草子』第四十四段。「七月ばかりに、風いたう吹きて、雨など騒がしき日、おほかたいとい涼しければ、扇もうち忘れたるに、汗の香すこしかかへたる綿衣の薄きを、いとよくひき着て、昼寝したるこそ、をかしけれ。」
- (10) 『枕草子 REMIX』新潮社、2004年。
- (11) 同書、79頁。
- (12) 同書、81頁。
- (13) 1960年代までは、詩歌や小説、評論などの同好の仲間による、資金を出し合っただけの機関誌であった

が、1975年のコミックマーケットの始まりとともに、主流は、漫画やアニメをもとにした二次創作同人誌、さらに俳優や歌手を主人公にしたブログ内「同人誌」のようなものも生まれた。

(14) 『源氏物語』。紫式部（970年頃—1019年頃）による小説。文献初出（1008年）。

(15) 藤原孝標女（1008-1059年以降）。『更科日記』（1059年頃）の作者。

執筆者について——

西澤栄美子（にしざわえみこ） 1950年生まれ。もと成城大学講師。専攻＝美学，フランス文学。小社刊行の主な著書には、『書物の迷宮』（1996年），『宮川淳とともに』（共著，2021年），主な訳書には，クリスチャン・メッツ『映画記号学の諸問題』（共訳，1987年），同『映画における意味作用に関する試論』（共訳，2005年）などがある。

【連載】

再会するために

—Books in Progress 18

村山修亮

6月に刊行を予定している「ブラジル現代文学コレクション」の1冊、オスカル・ナカサト『ニホンジン』（原書は2011年刊行、武田千香訳）に、つぎのような一節がある。

どこか遠くへ行け、だれもおまえを知らないところへ、トッコウタイが追ってこないところへ。そしてその後でサトコを呼びにやれ、なぜなら妻の場所は夫のそばだから。そして平和に暮らせ。望むならガイジンとして。

本書は、ブラジル日系三世である語り手の「ぼく」が、日本からブラジルへと入植した日系一世である「オジーチャン」の記憶を辿るイナバタ家の物語である。先に引いたのは「オジーチャン」の息子であり「ぼく」の叔父である「ハルオ」に向けて、「オジーチャン」が投げかけたことばだ。

ひろく知られているように、ブラジルの日本人コミュニティには、第二次世界大戦の敗北を信じられない「勝ち組」と、敗北を正しく認識することができた「負け組」が存在し、「負け組」に対する「勝ち組」の過激なテロ行為に多くの血が流れたという。ここでの「オジーチャン」は「勝ち組」の幹部とも言えるような存在で、一方の「ハルオ」は「負け組」に属し、現地の新聞に敗戦の記事を寄稿したことから、「勝ち組」のテロ組織「トッコウタイ」に命を狙われることになる。「オジーチャン」は息子の「ハルオ」が「ハラキリをするならまだホツとする、それが唯一名誉を守る方法だから」と考えているものの、それを強要することもできず、前述のように述べるのだ——「どこか遠くへ行け、だれもおまえを知らないところへ」。

じっさい、「ハルオ」はその後自宅を出て妻の実家に逃げる。しかし、「トッコウタイ」に居場所を突きとめられてしまい、「ハラキリ」を強要されることになる。「ハルオ」は「ハラキリなどするものか、後悔するようなことも恥となることもなにひとつしていない」と発し、どうにか「オジーチャン」は両者を仲裁しようとするが、「トッコウタイ」によって銃殺されてしまうのだ。かれは「どこか遠くへ」逃げることは叶わなかったが、「ハラキリ」という誇り高き行為を拒否し、「ガイジン」になろうとした「非国民」だったと言える。しかし、どうにかならなかったのか。妻と落ち合い平和に暮らせる道はなかったのか。

*

日本国籍を持つ両親のもと、日本で生まれ育った者がナショナル・アイデンティティを意識する場面は、幸か不幸かそれほど多くはないように思われる。いやむしろ、『『アイデンティティ』があるとしても、それは必ずしもナショナルなものである必要はなく、ネーションや文化、宗教、芸術、言語の交差するもの』（ジャン＝リュック・ナンシー『アイデンティティ——断片、率直さ』伊藤潤一郎訳、水声社、2020年、84頁）であるとさえ思う。しかしながら、民族や領土についてあらためて正しく考えなければならぬ今、本書はナショナル・アイデンティティを問題化することをとおして、さま

ざまな状況に置かれている他者をよりよく想像するための道標になってくれるはずである。語り手の「ぼく」や著者のオスカル・ナカサトのような日系三世は、じぶんが「ブラジル人」であるという意識と、他人から「ジャポネーズ」と呼ばれる現実の分裂を、どうにか統合する必要に迫られてきただろう。「オジーチャン」も、言わずもがな、みずからの「ヤマトダマシイ」に寄りかからなくては、異国で生き抜くことができなかつたに違いない。私とはだれか、国とはなにか、故郷とはなにか、歴史とはなにか……オスカル・ナカサトが丹念な調査から書き上げた本書を、ぜひ手に取っていただければ幸いである。

終章では、時間が現在へと戻り、ほとんどことばを発しない「オジーチャン」がつつじの盆栽を黙々と手入れする姿が描かれている。「ハルオ」の喪失と敗戦でじぶんが根無し草になったのとは対照的に、その盆栽は立派な根上りを土からあらわにしている。「ぼく」はその光景を眺めつつ、日本へ働きに行くことにしたと「オジーチャン」に報告して、この物語の幕が閉じられることになる。

遠い日本の情景は仮定や味わったことのない感覚ではなく、それは記憶であり、幾世紀もの曲がりくねった道の一片で、その脇には見覚えのある石や茂みがある。ぼくはいつもピンカラキョーダイやミソラヒバリを聴いていたから、それらの歌はぼくの中にまったく別の境遇で眠っている古い人物をみつけ、その人が目を覚ますと、不思議なことに、たとえ涙を流しながらでも幸せな気分になる。ぼくが日本に探しに行くのはその人なんだ。

われわれは、悔恨にとらわれた「オジーチャン」に、「ガイジン」として生き抜こうとした「ハルオ」に、新たな旅へと向かう「ぼく」に、三世代に渡るイナバタ家の人たちに、時を超えて再び出会うことはできるのだろうか。「ミソラヒバリ」は歌っていた。「川の流れのように／ゆるやかに／いくつも時代はすぎて」。

執筆者について――

村山修亮（むらやましゅうすけ） 1991年生まれ。水声社編集部所属。

【連載】

ウクライナから遠くはなれて

——校正刷の余白に3

鈴木宏

2月24日、朝、起きると、戦争がはじまっていた。

前夜、遅くまで仕事をし、それからワインを飲んだからか、目覚めたのは昼近かった。テレビをつけると、アナウンサーが「戦争！ 戦争！」と連呼していた。ロシア軍がウクライナ国境を越えて、戦車や装甲車を連ねて、キエフに向かっていているようだ。米軍の情報筋は、まもなく、数時間以内にキエフは陥落するだろうとみている、とNHKの正午のニュースが伝えている。

アメリカの政府・軍の高官たちが、ロシアーウクライナ国境に集結した十数万のロシア軍部隊が数日中に、国境を越えてウクライナに侵攻しそうだ、という警告を発していたのは知っていたが、プーチンがまさかほんとに戦争をはじめるとは思ってもみなかった。グロズヌイとアレppoで（ひとつの都市をまるごと廃墟にして）勝ち、クリミアで（特殊部隊と認識票をはぎ取り黒頭巾をかぶったロシア軍兵士をつかって、組織的抵抗らしい抵抗もうけずに）勝ったのに味をしめたのだろうか。わすれるところだったが、南オセチアとアブハジアでの（プーチンの）勝利もあった。

だが、キエフの場合、チェチェンやシリアのような「田舎」ではない、東の端の方とはいえ、れっきとしたヨーロッパだ。おまけにキエフは、9世紀に、キエフールーシ公国発祥の地ではないか。そのキエフに向かって、ロシア軍がミサイルを撃ち込み、戦車隊が進撃するなどは、いったい誰が考えたのだろうか。しかも、グロズヌイやアレppoでの戦いのころに比して、SNSもインターネットも格段に普及している。世界中がロシア軍の一挙手一投足をみつめている。衆人環視のなかでは、拷問も虐殺も、その他もろもろの「戦争犯罪」も、行いようがないではないか。

アメリカは、いったいどんな「情報」をもとにして、「プーチンが戦争をはじめそうだ」などという警告を発しているのか。そんなことはあり得ない。こう私は高をくくっていた。私だけでなく、専門家を含め、ほとんどの日本人、いや、世界中の人々がそう考えていたのではないだろうか。

だが、戦争ははじまった。それも、はじまったばかりだ。

バイデンー岸田コンビでプーチンに勝てるだろうか。

2月25日。今日の新聞の一面トップが（あたりまえだ！）、昨日の、ロシア軍のウクライナ侵攻をつたえている。それによると、どうやらプーチンは、昨日のウクライナ侵攻を「戦争」とは呼ばずに、「特別軍事作戦」と呼んでいるらしい。さすがの厚顔無恥のプーチンも、「戦争」はあまりに人聞きが悪いとでもおもっているのだろうか。

《ロシアのプーチン大統領は、24日未明（日本時間同日午前）、国営テレビを通じて緊急演説を行った。作戦の目的は親露派支配地域の「自国民保護」であり、北大西洋条約機構（NATO）への加盟を目指すウクライナを「非軍事化」させるための「自己防衛」だと主張した。ウクライナの占領は目標としていないとのべた。》（『産経新聞』2022/02/25付、1面）

「自国民保護」のための他国への侵攻という口振りには聞き覚えがある。南オセチアの時も、アブハジアの時も、クリミアの時も、そうだった。プーチンの「バカのひとつ覚え」だ。

7面に「プーチン大統領演説要旨」というのが載っている。

《私は 21 日の演説で、最大の懸念と心配、無責任な西側諸国がロシアに対して生み出してきた本質的な脅威について話した。北大西洋条約機構（NATO）は、軍備をロシア国境にちかづけている。

過去 30 年間、われわれは NATO との間で辛抱強く合意を試みてきたが、NATO は拡大し続けた。われわれの利益と合法的な要求……》

プーチンのこんな演説を書き写すのはむなしだが、そのすこし先の部分には、こうある——

《ソ連が解体され能力の大部分を失った後も、ロシアは核保有国のひとつだ。最新鋭兵器もある。われわれに攻撃を加えれば、不幸な結果となるのは明らかだ。》

小学生なみの下手なレトリックだ。「いざとなれば核兵器を使うぞ」と脅しているわけである。プーチンには「前科」がある。日本の、政治家はもちろん、政治評論家もジャーナリストも、ほとんど全員が頬かぶりをして、聞かなかったようなふうを装っていたが、クリミアへの侵攻のしばらく後に、プーチンは、ロシアのあるテレビのインタビューに答えて、「じつはあのときは核を使うことも検討していた」と語っているのだ。プーチンは、21 世紀の“Dr. Strange Love”だ。

幸いにも——クリミアのひとびとにとっては「幸いにも」などとは死んでも言えないわけだが——、クリミアのときは、プーチンの作戦が大成功をおさめ、核は使われずにすんだ。今回も、「大成功をおさめ」れば、核は使われずにすむだろうが、2 匹目の泥鰌がつねにいるとはかぎらない。今回、プーチンが核を使っても私は驚かない。今回、プーチンが核を使わなかったとしても、いずれ、第二、第三のプーチンが現れて（ロシアに現れるとは無論限らない）核を使うだろう。核兵器を発明し、それを二回も使って「戦勝」という「果実」を得た人類が三回目は使わない、などとどうして言えるのだろうか。

三回目の核が使われれば、それが四回目、五回目の核使用を誘発し、それが結局は、数百発、数千発の核弾頭のシャワーとなって地球に降り注ぐ。それを恐れて、バイデン大統領はロシア—ウクライナ戦争に参戦するのをためらっている、と言われている。本当にそうなのだとすると、バイデンはプーチンの下僕というよりは奴隷だ。核で脅されたら、核で脅し返すしかないではないか。いったい何のために核を持っているのだ。日本のように、核を持っていないのであれば、核で脅されてシュンとなる、というも分からなくてはならない（おおいに情けないことではあるが）。核を持っているということは、核で脅してくるような国家や組織や個人やらが現れた場合には、核で脅し返すということではないか。それが「核抑止」「核による相互抑止」ということではないか。一方が怯んでしまったら、「核抑止」にならない。敵対する核保有国の一方の政治指導者が、他方の国の政治指導者に脅されて核の使用を躊躇う、などという事態は、国際政治学の「相互確証破壊」の理論においても想定されていないのではないだろうか。あまりにバカバカしい！

あるいは、そういうふうに、政治指導者が怯えて怯んでしまった場合には、早急にクーデターを起こし（幸か不幸か、戦争中に選挙をやっている暇はない）、もうすこしまとま、「勇敢な」政治指導者にすげかえる、といったようなことでも、国際政治学の教科書は勧めているのだろうか。

そもそも、第三次世界大戦——バイデン大統領はこういう表現を使っているようだ——が起きようが起きまいが、いずれ人類は滅亡する。これは、善悪の問題でも、正邪の問題でもなく、事実の問題である。私は預言者ではない。近年の地球史の研究の進展がそれを教えてくれている。

地球史の研究によれば、これまで地球上には、2600 万年ごとに、小惑星がシャワーのように降り注ぎ、そのたびに種の大絶滅がおこった、とされている。種の大絶滅とはいっても、若干の程度の差はあり、史上もっとも大規模だったのは、5 億 4000 万年前のいわゆる「カンブリア大爆発」の直前の大絶滅であり、史上もっとも有名なのは、6500 万年前のいわゆる「恐竜の絶滅」を引き起こした

小惑星シャワーであろう。

地球史では、この2600万年ごとの小惑星シャワーは今後も起こるとされており、次の小惑星シャワーは1300万年後、ということになっている。人類が第三次か第四次か第五次かの世界大戦をかりに生き延びたとしても、この1300万年後に起こるであろう小惑星シャワーを生き延びることができるだろうか（幸か不幸か、前回の小惑星シャワーのさいには人類はまだ出現していなかった）。

かりに人類がこの1300万年後の小惑星シャワーを生き延びたとしても、次には、より決定的な出来事が待っている。プレートテクトニクスの停止だ。現在の地球の環境を維持し、安定させているのは、プレートテクトニクスの運動だ。あらゆる運動がそうであるように、プレートテクトニクスの運動も永遠というわけにはいかない。その停止は、2～3億年後とされている。停止以前から、地球環境は激変し、動物のみならず、植物であれ、微生物であれ、あらゆる生命が地球上から消滅する。

最後は、地球そのもの、太陽系そのものの消滅だ。それは40数億年後のこととされている。

現在、人類の最期というのは、こういうふうに考えられているわけだが、この1300万年後あるいは1～2億年後に必ず起こるとされている人類の消滅を回避する方法はないのだろうか。絶対ないとははいえないだろうが、そのためには人類は「変化」する必要があるのだろうか。どんなふうにする？ サイボーグ化、一部の研究者たちはそう考えているようだ。いまのところ、サイボーグ化というのは、人体のごく一部をサイボーグ化して、人間の寿命をすこし、150歳か200歳くらいまでのばす、というような文脈で語られることが多いようだが、サイボーグ化がどんどんすすんで、人体の90%、99%、99.99%がサイボーグ化した場合、いったいどうなるのだろうか。99.99%がサイボーグ化した人間は、それでもまだ「人間」なのだろうか。人類はそうやってまで、いわば「永遠に」生き続けたいのだろうか。すくなくとも私は、そうは思わない。寿命は今程度で十分だし、1300万年後あるいは1～2億年後に人類の消滅のときがやってきたなら、そのときには、ジタバタせずに、いさぎよく(?)消滅するのがいいのではないか、そう思う。

とすれば、なにも、慌てて核戦争を引き起こして消滅する必要はないのではないだろうか。1300万年後あるいは1～2億年後には必ず消滅するわけだから。消滅までの短い時間を核戦争などというバカげたことに費やしてどうするのだ。もうすこしましな時間の使い方があるはずだ。誰もそうおもうはずだ。私もそう思う。

だが、人間は「愚か」だ。「愚か」という表現がお気に召さないようなら、人間は神ではない、といってもいい。人間は定義上、神と悪魔の中間の存在だ。）とくに、19世紀の後半に、「神」が死んで以降、さらに「愚か」になった。愚かというよりは、傲慢というべきかも知れない。広島、長崎以降、70数年間、核が、戦場であるいは都市にたいして使われなかったというのは僥倖というほかない。人類が「賢く」なったのではない。幸運だけだからだ。この70数年間、核が使われなかったといっても、「実験」という名の核爆発は、この地球上で何十回、何百回となく繰り返されてきた。いままた北朝鮮は核実験を再開しようとしている。

地球上に核兵器を保有している国が1カ国しかなかったら、世界は平和だろう。だが、それは、奴隷の平和だ。では、複数の国が核兵器を保有している場合（たとえば現在のような場合）はどうなのだろうか。「平和」の程度は減少するが、「奴隷状態」の程度も減少するという事なのではないだろうか。この場合、核兵器を保有している国が1カ国しかない場合とくらべて、核戦争の危険は高まるが、核保有国の政治指導者にほんのチョップリの「理性」さえあれば核戦争は回避できる。国際政治学はそうかんがえる。だから、「相互確証破壊」の理論は、人間の「理性」に賭けている、ともいえる。たしかに、「美しい」理論ではないが、ほかに頼るべき理論はない。

いま、「相互確証破壊」の理論はプーチンによって試されている。あるいは、挑戦をうけている、といってもいい。

3月1日。『産経新聞』の1面のトップに「核部隊が戦闘態勢」という見出しが躍っている。もっとも、一番大きな見出しは「停戦交渉」だが。本文には、「露国防省は28日、ショイグ国防相がプーチン大統領に、核兵器を運用する陸海空戦力の戦闘警戒態勢への移行が完了したと報告した、と発表した。[……]核戦力の戦闘警戒態勢への移行は27日、プーチン氏がショイグ氏らに指示していた」とある。「核戦力の戦闘警戒態勢」とはいったい何のことなのだろうか。きのうのテレビのコメンテーターも、「今までにない表現」だという意味のことを言っていたが、冷戦の終結とともに、米ソがともにはずしたと言われている、核の照準のことなのだろうか。

ロシアをふくめ、世界の各地で反戦デモがおこっている。おなじ『産経新聞』の8面に、ロイターが配信したらしい、27日のベルリンでのデモ（反戦集会？）の様子の写真がのっていた。写っているのは「プートラー」か？



3月2日。ウクライナは今、世界中で義勇兵を募っているようだ。日本のウクライナ大使館も、公式ホームページで、義勇兵を募っているらしい。70人前後の応募がすでにある、と2、3日前のテレビのニュースが伝えていた。

今日の『産経新聞』の5面のベタ記事に驚いた。見出しに「ウクライナ募兵で／外相『渡航やめて』」とある。本文を読むと、「林芳正外相は1日の記者会見で、在日ウクライナ大使館がSNSで自衛隊OBらに外国人部隊への参加を呼び掛けていることについて『外務省としてウクライナ全土に退避勧告を発している。目的のいかんを問わず、渡航をやめていただきたい』と述べた」。外務省はいったい何を考えているんだ。母親が幼稚園児に「あぶないところ、いっちゃダメ」というのなら分らないでもないが、(もちろん本人の責任においてということだが)「あぶないところ」もふくめて、どこへでも行く自由が日本人にはあるはずじゃなかったのか。そうした自由もないというのなら、ロシア以下ではないか。プーチンにわらわれるぞ！

3月20日。テレビのニュース番組で、コメンテーターが、どうやらプーチンはキエフ占領をあきらめたようだ、と言っている。たしかに、ロシア軍の侵攻速度は素人目にもあまりに遅い。キエフの北東方面では、一部、ウクライナ軍に押し戻されているようだ。

しかし、そのことを喜んでばかりもいられない。南部のマリウポリでは、ロシア軍は、恐れられていた、一種の焦土作戦、グロズヌイやアレッポでやったのと同じような、市街地への徹底的な空爆とミサイル攻撃を展開しているようだ。キエフが無理なら、せめてマリウポリを陥落させようとしているのではないだろうか。

3月24日。2～3日前に、キエフ市長が「(ロシアの) 奴隷になるよりは死を選ぶ」と発言したらしい。いかにも元ボクサーらしい、がっちりした体型の市長が、同じく元ボクサーだったという弟とともに記者たちの前で話している映像が繰り返し流れている。こうした市長がいればこそなのかどうかは分からないが、キエフを守っているウクライナ軍は善戦している。驚いたことに、キエフの近郊では、反プーチン派(ということはつまり、反カディロフ派ということだろう)のチェチェン人民兵たちも最前線で戦っている、と昨日のF2が伝えていた。侵攻から1カ月たつが、キエフ陥落どころか、一部ではロシア軍を押し返し始めた。プーチンの歯ぎしりが聞こえてくるようだ。数日でもかたずくはずが、1カ月たっても、キエフひとつ落とせないでいる。

一方、南部の状況は危機的だ。ロシア軍の砲撃、ミサイル攻撃によって、マリウポリはすでに街全体が廃墟と化しつつある。グロズヌイやアレッポの再現だ。今日のテレビニュースによれば、取り残されている十数万の市民の一部はロシアに連れ去られているようだ。その連れ去られた市民たちは、ロシア各地、とりわけシベリア、極東方面に「移住」させられるようだ。忌むしい「シベリア」抑留の亡霊だ。その「極東方面」には「サハリン」も入っているというから、二度驚いた。北方四島ははいっていないのだろうか。プーチンは日本を挑発しようというのだろうか。日本を挑発してどうしようというのだろうか。

マリウポリでは、噂されていたチェチェンの親プーチン(というよりも、プーチンの子分)の独裁者、カディロフの私兵、悪名高いカディロフツィがやはり戦闘にくわわっているようだ。彼ら自身がマリウポリでつくったらしい宣伝ビデオが流れている。

3月25日。ウクライナ側にたつてロシア軍と戦いたいという志願兵が、すでに52カ国、2万人以上にのぼっていて、その一部はすでにウクライナに入国している、とテレビのニュースが伝えている。どこが集計したのだろうか。ウクライナ政府か、なんらかの国際機関か、あるいは欧米のメディアだろうか。その「2万人以上」のなかに、日本人は入っているのだろうか。たぶんいないだろう。

志願兵、義勇兵、国際義勇軍、そうだ、国際義勇軍だ！ 私はこれまで、どんな戦争にも参戦したことはない。太平洋戦争(これは私が生まれる前だ)、朝鮮戦争(このとき私はまだ生まれたばかりだ)、ベトナム戦争(これは高校・大学時代だ、これ以降の戦争は知ってはいるがもっぱらメディアを通してのことだ)、湾岸戦争、アフガン戦争、イラク戦争、……1970年代後半以降、私の時間はもっぱら「仕事」に費やされてきた。ときどき多少の本を読み、たまに展覧会やコンサートに出かけるにしても、それも私の仕事の一部である。とはいえ、わたしとて、日韓条約反対闘争、ベトナム反戦運動、第二次安保闘争(いずれの闘争も今となつては何のための闘争だったのか私自身でもよく分からないのだが)には(ほんのチョッピリとだが)参加してきたし、今現在は、アマゾンに対する書籍出荷拒否闘争を戦っている最中でもある。

考えてみれば、半世紀近くにわたって、私がまがりなりにも仕事に専念できたのも、日本が平和であればこそだ。たしかに、日本国内にも問題はいろいろとある（もちろん、だからこそアマゾンに対する書籍出荷拒否闘争などといったものもおこるわけだろう）、しかし、諸外国、たとえば北朝鮮、新疆ウイグル、チベット、香港、ミャンマー、さらには中東やアフリカの一部の国とくらべれば、日本は「天国」のようなものだ。こうした国々・地域の惨状に、日本「天国」の（私を含めた）住人たちは戦後の70数年間、見て見ぬふりをしてきた。

だが、今度ばかりはそうはいかないのではないか。私はそう思っているのだが、（日本政府はいつものことだが）欧米諸国の政府は、すこしばかりの武器をウクライナに送って、あとは高みの見物を決め込んでいる。西側諸国はウクライナを見殺しにするつもりなのだろうか。ウクライナの数千、数万、数十万の人々が、ロシアの数百発、数千発のミサイルによって、住まいを破壊され、殺戮されているというのに、日頃、「人道」を声高に唱えている西側諸国は、指をくわえて見ているつもりなのだろうか。軍事には軍事で、核には核で対抗するしかないではないか。国連安保理の西側常任理事国——日本はこの席を占めていなかったことに感謝すべきだ、あやうく世界中の物笑いのタネになるところだった、安保理で「自衛隊は軍隊ではないので戦争はできない」などという支離滅裂なことを言わずにすんだからだ——の三巨頭、バイデン、ジョンソン、マクロンがこれほど無能だとは思わなかった。これが国家レベルの話ではなく、個人のレベルでのことだとしたら、この「三虚頭」は、たんなる臆病者、卑怯者ということになる。

国家が戦わないのなら、個人が戦うしかない。それが義勇兵だ。国際義勇軍だ。

[以下、Q数オトス。10 Qくらいか→]（国際義勇軍に参加するための口実を縷々述べてきたが、簡単に言うと、じつは私は戦争が好きなのだ。戦争に限らない。蜂起も、暴動も、内乱も、内戦も好きだし、とりわけ素晴らしいと思うのは革命だ、といたいところだが、これらのものはほとんど同じものだ、すくなくとも私にとっては。胸が高鳴って…… と、これ以上書くと、本誌が発禁処分をくだらぬ脱線はこのくらいにしておこう。）[← 10 Q, ここまで。以下、Q数ナミ]

3月28日。ロシア軍はジョージア（南オセチア、アブハジア）駐留の7,000名の部隊の半数をウクライナ戦線に投入することを決定した模様、とテレビのニュースが伝えている。

4月1日。午後の編集・制作全員会議の最後に、老骨に鞭打ってウクライナにゆくつもりだ、しばらく出社できないが、私の留守中は…… と、私がはなしはじめると、若手の編集スタッフのひとりが私の話を遮り、「社長 [← 私のことである、私は幸か不幸か、会社ではこう呼ばれている]、準備はできているんですか」と言う。「もちろん。準備万端だよ」「スマホはもちましたか。今の戦争にはスマホは必須らしいですよ。敵・味方の公開情報は何でも見れるし、フェイクニュースだってみれますよ。それに、なんといっても、今や一種の武器ですからね。ドローンの操縦もできるし、ちょっとした地対地ミサイルくらいなら発射できるらしいですよ……それにだいたい、ウクライナの戦場に公衆電話はないと思いますよ」と彼は言う。

私は不明を恥じた。そういえば確かに、1週間ほど前にテレビのニュースが伝えていたウクライナ軍の兵士がドローンを操作し、ロシア軍の戦車を破壊するところだという動画では、その兵士は、スマホのようなものを（ただし、剥き出しではなく、ちいさなケースないしはボックスのようなものに入れて）使っていた。「保守」を自認し、「新しいもの」はなるべく使わない、ということを経験と

してきた私ではあるが、戦争にゆくのに武器なしというわけにはゆかない。

さいわいここは東京だ。モスクワではない。スマホはどこでも、いつでも買える。

スマホを買って、家に帰り、家族にも、ウクライナ行きの件を伝えた。案の定、大パニックで、愚妻 [← 女性差別の意図はない] は、「離婚！ 離婚！」と叫び、愚息 [← 若者差別の意図はない] は、「戦争！ 反対！ 戦争！ 反対！」と連呼する。「お土産を買ってくるから」と言ったのだが、これはまったく効果がなく、かえって火に油を注ぐしまつ。仕方がないので、「生命保険に入ってから行く」という。これではスラブスティックコメディだな。

4月2日。おそい昼食のあと、たまってしまった数日分の新聞を読んでいると、友人のMくんから電話。彼は興奮しながら、「またはじまった！ またはじまった！」と叫んでいる。「なにが？」ときくと、ウクライナにつづいて、ジョージアとチェチェンでも戦端が開かれたのだという。あわててテレビをつけたが、ニュースらしきものは地上波でも衛星放送でも、どこもやっていない。そうだ、スマホだ。ネットのニュースだ。

ネットは、ジョージアとチェチェンのニュースで溢れかえていた。ジョージアでは、事実上ロシアの支配下にあった南オセチアとアブハジアとの「国境」を越えて、戦車部隊を先頭にしたジョージア軍が、全土を奪還すべく進撃中らしい。CNNによれば、ロシア軍の抵抗は軽微で（それはそうだ、駐留していた7,000名の部隊のうちの半分はすでにウクライナ戦線に移動中か、すでに到着して——2,3日前に、その一部がクリミアに到着したという報道もあった——、戦い始めているわけだから）、ロシア軍基地の確保作戦中に散発的な銃撃があり、兵士ひとりが軽傷を負った程度らしい。ロシア軍兵士のほとんどは戦うことなく投降したようだ。ジョージアでもやはりロシア軍の士気は低い。南オセチアとアブハジアがロシアに奪われた2008年以来、ジョージアはひそかに軍備を増強しつづけていたらしい。対戦車ミサイル（アメリカ製のジャベリンか）、対空ミサイル（スティンガーか）、そしてドローン（すっかり有名になったトルコ製のバイラクタルか）などを大量に保有しているようだ。まもなく、数時間以内に、南オセチアとアブハジアの全土が解放されるだろう、とBBCは伝えている。そういえば、2,3日前、テレビ番組に出演していたジョージアの若い駐日大使（テロップには「早稲田大学卒」とあった）がジョージアの現状と南オセチア・アブハジア問題に対する政府の方針を説明しつつ、しきりに「平和的解決」をくちにしてきたのに違和感をもったのだが、あれはもしかすると、直近に迫った「軍事的解決」を悟られまいとする煙幕だったのかも知れない、と今にして思う。

一方、チェチェンでは、反プーチン、反カディロフの独立派武装勢力がチェチェン各地で一斉に蜂起したらしい。首都グロズヌイでも、独立を支持する市民たちが独立派武装勢力とともに政府施設の制圧に乗り出し、すでにほとんどの政府庁舎は独立派の手に落ちたようだ。並行して、独立派市民と独立派武装勢力からなる革命委員会が組織され、まもなく、独立宣言が発せられる模様だという。独裁者カディロフは、さらに上位の独裁者プーチンに命じられて、みずからの私兵集団カディロフツイとともにマリウポリにいる。その間隙を縫ってのみごとな作戦だ。カディロフはマリウポリの廃墟の上で臍をかんでいることだろう。これでプーチンは、ウクライナだけでなく、ジョージアともチェチェンとも戦わなければならないとなった。いよいよプーチンは核を使うのだろうか。

つぎは日本だ。ヘルメットと防弾チョッキをおくただけで、いつまで高みの見物を決め込むつもりなのだろうか。経済制裁？ 経済制裁を科されて戦争をやめた国はない、いわゆる「専門家」でさえそういつている。北朝鮮もイランも、どっこい生きている。武力には武力で、核には核で対抗するしかない。核の使用に対して、経済制裁？ わが家以上のスラブスティックコメディだな。岸田政権

はこのまま何もしないつもりなのだろうか。

4月4日（パリ時間）。きのう、ようやくパリについて、その足でウクライナ大使館にいった。国際義勇軍参加の意思を表明すると、対応は丁寧だった。私は、フランス語のごく簡単な短いフレーズだけを使うことにし、相手かまわず、さいごに必ず、“poutine à bas! impérialisme à bas! stalinisme à bas!”と付け加えることにした。相手は最初はちょっと驚くが、そのうち微笑をうかべるようになる。相手が英語を使ってきたら、ゼレンスキー大統領に倣って、さいごに、“to be or not to be, that is the question”と付け加える。貧弱な語学力をごまかすうまい手だ、と私はひとり、悦に入っている。

係官の面接を待っている間に、登録受け付けのスタッフらしき人物に、答えるはずはないと思いつつ、japanese red army から参加したいと言ってきた人間がいないかどうか、尋ねてみた。彼は、「4, 5人いる。彼らは役に立ちそうだ」という。すでにウクライナに出発したのか、ときくと、それには答えられない、という。敵はチェチェンのカディオロフツィや民間軍事会社ワグナーをカネで雇ってマリウポリに投入している。ウクライナ側がドイツ赤軍や「赤い旅団」の元メンバーたち、アメリカの民間軍事会社に（有償か無償かはともかく）参戦を要請したからと言って、批判する人間はいないだろう。（と、書いたが、日本にはいるかもしれないな。）

ほどなくして別室に案内されて、係官から私のスキルについて、いろいろと質問を受けた。だが、スマホを持っていることをのぞけば、私はその係官からみれば、まったくの役立たずだった。やむを得ないことではあるが、私のキャリアのすべてを否定されたような感情に襲われ、ホテルまでの足取りは重かった。

スマホがなる。ウクライナ大使館からの連絡だった。やはりわたしはウクライナの戦場では役に立ちそうもない、という判断に至ったようだ。やむを得ない。「老人」というのは現代社会においては、かくも「惨めな」ものなのである。だが、送られてきたメールの最後に「貴兄の希望に添えないことは極めて残念であり、本官のおおいに遺憾とするところである。貴兄のウクライナ国民に対する連帯の感情と勇敢さに対して深い感謝と敬意を表する」（原文フランス語、拙訳）とあり、私としても、おおいに救われた思いだった。

さて、どうしたものだろうか。このまま手ぶらで帰るわけにもいかない。ともかくポーランドのウクライナ国境付近までいってみようか、あるいは、モルドヴァあたりから、ジャーナリストだと偽って（相手がそう思うかどうかはともかく、私も広い意味でのジャーナリストには違いないわけだから「偽る」ということにはならない筈だ）ウクライナに不法入国することにしようか。それとも、「兵士」は諦めることにして、マレヴィッチでも見て帰ることにしようか。ロシアーウクライナ戦争のさなかのマレヴィッチ見物も悪くはない。

20年ほど前にパリにきた帰りにアムステルダムによって、かの地の市立美術館（ここはマレヴィッチ作品の素晴らしいコレクションで知られている）でマレヴィッチを見たことを思い出す。そのときは愚妻と愚息（10歳前後だったろうか）もいっしょだったので、彼らにマレヴィッチ見物を提案したのだが、彼らは、やはりそのときかの地で開催されていた「動物絵画なんとか展」というのをどうしても見たいという。私は何とっていいか分からなかった。私なりには彼らの「動物好き」を理解しているつもりだったが、わざわざアムステルダムくんだりまで来て、おまけに時間もないうち（われわれには飛行機の乗り継ぎのための、ほんの数時間の滞在時間しかなかった）、「動物絵画なんとか展」を見る気にはなれず、二班にわかれての展覧会見物とあいなったわけである。

マレヴィッチの作品のほんものをみるのは初めてだった。これ以後も、現在に至るまで、本物を

見る機会には恵まれていない。比較のおおきな部屋に、有名な白い画面の、あれは油彩だったろうか、作品が数点、ゆったりと掛けられていたのを覚えている。だが、それ以上のことは覚えていない。なにしろ20年以上も前のことだ。

それに私は、彼らには同様に興味がないだろう別の用件のために当地のべつの美術館（アムステルダム国立美術館？ いまや記憶があいまいではっきりしない）にもゆきたかったのである。というのは、その美術館にあるはずの、荒川修作の《細部としてデュシャンの『大ガラス』をもつダイアグラム》という一種のオブジェを見たかったのである。その時からさらに以前の、1970年代か1980年代ころだったと思うが、ある美術雑誌だったか美術年鑑の類いだったかに、この作品のちいさなモノクロ写真が掲載されていた。デュシャンの《大ガラス》に似て、二枚のガラス板のようなもののあいだにさまざまなオブジェ（オブジェそのものではなく、オブジェの形象だろうか。おおきな形象としてはコウモリ傘などもあったような気がする）が挟まれているような作品で、《大ガラス》ほどは大きくなかったように思う。なぜか私はこの作品が気になっていて、機会があれば見たいと思っていたのである。

常設展示されているかどうかは無論わからなかったが、とにかく行って見て、常設展示されていなかったら、その場で、美術館側に、「私は東京の美術ジャーナリストだ（この点も、私は広い意味での美術ジャーナリストと言えなくもないわけだから、「嘘」ということにはならない筈だ）、ある雑誌にこの作品とこの美術館のことを紹介したいんだ」とかなんとか言って、その場で頼み込んで見せてもらおうと思っていたのである。「成せばなる」の突撃精神である。

マレヴィッチを見てから訪れたその美術館ではやはり常設展示はしていなかった。そこで、受付の女性に、件の荒川作品を見せてもらえないかというのと、彼女は当館の所蔵作品カタログのようなものを調べ始めた。しかし、調べても調べても荒川作品は見つからないようだった。10分ほどもたつたらうか。彼女はようやく諦めて、貴兄がお探しの作品を当館は所蔵していないようです、その作品をどこが所蔵しているかは当方では分かりませんが、当館には図書室があり、資料がかなり揃っているはずですから、そちらでお調べになってはいかがでしょうか、と言う。

仕方がないので、図書室に移動し、棚をながめていると、なんと、驚いたことに、日本語の「美術年鑑」「現代美術家名鑑」といった類いの本が数冊あるではないか。さっそくページを繰ってみると、そのうちの一冊の、「荒川修作」の項に、この作品のタイトルが小さな活字で掲載されているではないか。おまけに、制作年、素材、寸法等も記載されていて、最後に、所蔵館まで書いてある。それがなんと、この館なのだ！ 私の記憶に間違いはなかった！

私はさっそく受付へ取って返し、件の「親切な」受付嬢にその「現代美術家名鑑」の類いの一冊を見せて、やはり当館にあるはずだ、と片言のつたない英語で、「再調査」(?)をやんわりと「要求」(?)した。しかし、相手はキョトンとしている。それもそのはず、受付嬢は日本語が分からないし、読めない。私がバカだった、と内心、反省していると、彼女はちょっと待って下さいと言って、どこかに電話をかけはじめた。

電話を置くと、彼女は、どうぞこちらへ、と私を待合室のような応接室のような部屋へ案内した。ここでちょっと待っていて下さい、と言って彼女は出てゆく。

しばらくすると、40代くらいだろうか、ガッシリした体格の男性が現れ、自分はこの館の所蔵作品の管理を担当している者だ、と自己紹介する。私はもう一度、同じことをはじめから説明し、無駄だとは思ったが、「現代美術家名鑑」、事情を話して図書室から借り出してきたあの「現代美術家名鑑」の類いを開き、「荒川」の項を指差した。彼は身を乗り出して、そのページを見つめる。日本語は読めないにしろ、多少の興味はあったのかもしれない。「わかった、調べてみる」と言い残して、彼は

出てゆく。

どのくらいあったらろうか、15分か、20分か。彼が書類のコピーのようなものを抱えて帰ってくる。それはどうも、この館の詳細な所蔵作品リストの原本のコピーのようだった。彼はおもむろに、“ar”のページを開き、“arakawa, shusaku”の項をゆびさす。そして、彼は、当館で所蔵している荒川作品は二点だけ、この版画とこのポスターだ——それは言われなくとも分かる、そのコピーに書いてあるのだから、そのくらいの英語は、片言英語の私にも十分に分かる——、貴兄がお探しの作品はやはり当館にはない、という。やむを得ない。これ以上はどうしようもない。私は諦めた。

東京に帰ってしばらくして、仕事で荒川に会った。荒川は自分の作品の所在についてはよく知っていたので、この作品の所在について尋ねてみた。彼が言うには、「あの作品はたしか、オランダのビジネスマンの*****（名前は失念）が買ったはずだ。彼はどこかの美術館に寄託したというようなことを言っていたけど……」。荒川もそれ以上のことは知らないようだった。

時は流れて、さらに十数年たったのだろうか。あるとき、愛知県美術館で荒川展があるという。そのチラシを何気なく眺めていると、裏のページに、何と、あまり大きくはなかったが、あの《細部としてデュシャンの『大ガラス』をもつダイアグラム》のカラーの写真が載っているではないか。しかも、キャプションのところには、小さく、「愛知県美術館蔵」とあるではないか。私がわざわざアムステルダムまで「見に行った」あの作品が日本で見るができる、のみならず日本の美術館が所蔵までしている！ さっそく見に行こう。会期は、とみてみると、すでに展覧会は終了していた。展覧会にしろコンサートにしろ、忙しすぎると、こういうことはしょっちゅう起こる。テリー・ライリーの来日公演も、三回目にしてようやく気付き、なんとか聴いたようなぐあいだ。荒川の展覧会にしても、ニューヨークから「凱旋」して以降の国内の展覧会はだいたいは見ているはずだが、近年のものは見逃しているものもかなりあるような気がする。

ともあれ、今回は、あの作品が国内に、愛知県美術館にあると分かったわけだから、焦る必要はない、いずれ見に行こう。常設展示されていないようなら、誰かに頼んで見せてもらおう…… といっても誰に？ などと考えているうちに、旧知のMさんが愛知県美術館の館長になったらいい、ならばMさんに頼んで…… などとぼんやり考えているうちに、Mさんは定年退職(?)してしまっただけだ。うーん、どうしたものか……

ちいさな音量で部屋のテレビのニュース番組をみながら（日本人式ながら視聴だ）、こんなことを断片的に、ぼんやり考えていると、モニターに、「緊急ニュース」とでている。テロップも音声もフランス語なのでよくわからないのだが、どうやら、日本の自衛隊が北方領土に向かっているらしい。まさか！ フェイクニュースじゃないだろうな。九州にいるはずの《海兵隊》（フランス人ニュースキャスターの表現）はいつの間にか根室に移動し、すでに北へ向かっているらしい。空挺部隊をのせたC-130輸送機も離陸したらしい。政府からも自衛隊からも公式発表はまだないようなのに、ずいぶん早い。さすがはF2だ。どこかからのリークなのだろうか。

しかし、こんなことが起こるはずはない。やっぱりフェイクニュースだ。

そうだ。スマホがある。ネットをみてみよう。BBCも同様のニュースをながしている。どうもフェイクニュースではないようだ。ネットはこのニュースで持ちきりだ。

本当だとすると、マレヴィッチ見物どころではない。マレヴィッチは次回にしよう、次回こられるだけの体力が残っていればだが。すぐ日本に帰って、自衛隊を支援する民間の部隊、防衛隊を組織するときだ。

自衛隊による北方領土の占領・奪還は、ウクライナに対する最大の支援になる。ロシアは二正面どころか、ジョージア、チェチェンをふくめて、四正面で戦うことを強いられ、ウクライナ方面にはりつけている戦力の一定部分をコーカサス、極東に割かざるを得なくなるだろう。頑強に抵抗を続けるウクライナが勝利する可能性がでてくるし、日本ももちろん勝利する。

F2の「緊急ニュース」のキャスターが、1時間後に、日本の首相、防衛相、総参謀長（フランス人ニュースキャスターの表現）、北方領土派遣軍司令官の記者会見がある、とつたえている。

とにかく、東京便の航空券を手に入れないと…… そうだ、スマホで予約できるはずだ、まずそれだ。コロナのせい、3時間後の東京便の予約が簡単にとれた。スマホは便利だ。おまけにフランスは、入出国に何の制限もない。すでにコロナの前と同じになっている。

東京にも電話してみよう。

電話口の愚妻の声は、「戦争」「戦争」と怯えているようだった。もとベ平連の闘士だったはずだが……「航空券がとれたからすぐ帰る」というと、「はやく！ はやく！」と、わけのわからないことを言う。「じゃあ、『パイロットに早くしてくれ』といっておくからね」と言って、電話をきった。よほどの慌てぶりだった。日本中がそうなのだろうか。

記者会見がはじまった。日本語の音声が入っているのがうれしい。フランス語の同時通訳がうるさい。まず、岸田首相が話し始めた。要約すると――

《・ロシアに不法占拠されている北方四島に対する《特別軍事作戦》を数時間前に開始し、すでに四島を奪還した。

・北方四島は今後、日本の施政権下に置かれる。元島民およびその子孫は故郷に帰還することができ、1時間ほど前までに、その第一陣はすでに悲願の帰還を果たした。

・ロシア人島民のロシアへの帰還は強制しない。今後、四島は、日本人、ロシア人、アイヌ族の、「三族協和」の地となるだろう。

・日本はすでに核武装を完了している。憲法上の問題はない。

・日本はウクライナと連帯して戦う。ウクライナ政府の求めに応じ、樺太に強制移住を強いられたマリウポリ市民1,000人の救出作戦をすでに開始した。

・日本は、同様にウクライナ政府の求めに応じ、陸上自衛隊10,000名をウクライナに派遣する。G7各国（米英加仏独伊）にも派兵を強く求める。》

つづいて、岸防衛相の補足説明――

《・この《特別軍事作戦》の司令官には、統幕長が首相によって任命された。

・北方四島の各島には、まず空挺師団が落下傘で降下し、ついで海兵隊がつぎつぎと上陸、ついで、海上自衛隊の輸送船から、元島民たちとその子孫たちが上陸した。車椅子に乗った98歳だという最高齢女性は涙を流していた。病院からベッドごと乗船してきた95歳の男性もいた。彼らは当面、公共の施設等に入居することになるが、明後日から、彼らのための住宅の建設がはじまり、3カ月程度で完成の予定。

・駐留するロシア軍のほとんどは、開戦前からウクライナ戦線へ移動しており、四島には、100名程度しかいなかった。抵抗らしい抵抗はほとんどなく、彼らは自らすすんで投降した。自衛隊員に銃を向けようとして、逆に、日本側から狙撃され、片足を負傷したロシア兵が1名いるだけだ。

・北方四島の各島は、今後、日本の施政権下に置かれる。元島民およびその子孫は故郷に帰還することができる。そのほか、希望する日本人は誰でも居住することができる。現在のロシア人島民のうち、島への残留を希望する者にも残留を許可する。強制的に送還することはしない。ロシア人島民た

ちは、手に手に日章旗とロシア国旗を打ち振って、自衛隊の上陸および元島民たちの帰還を歓迎した。本日午後、ロシア人島民たちによる「自衛隊および元島民歓迎住民集会」の開催が予定されている。

・秘密裏に準備を重ね、すでに日本は核武装を完了した。現時点で、ICBMは1,000基、SLBMは500基、中距離核ミサイルも500基、保有しており、移動式発射台、原子力潜水艦等も、すでに実戦配備されている。日本国憲法は自衛のための武装は、核武装もふくめて、禁じていない。アメリカ政府も了承している。いわゆる「非核三原則」は、世界に恒久的な平和が訪れるまで棚上げにする。

・ウクライナ政府の求めに応じ、陸上自衛隊のウクライナ派遣軍10,000名はすでに出発した。陸自は南部戦線でマリウポリの包囲を解き、十数万の市民の救出作戦を実施する。カディロフツィは日本軍、その「カミカゼ」精神、特攻精神を恐れている。かれらはすでに、チェチェンへの帰還の準備をはじめたようだ。

G7各国（米英加仏独伊）の大統領、首相には岸田総理が、国防相には私から、オンラインで派兵を強く求めた。各国とも前向きな検討を約してくれた。とくに、イギリスのジョンソン首相からは、「われわれも日本につづく。至急、閣内をまとめ、数日以内に必ず派兵する」という力強い発言があった。

・自衛隊の作戦を支援し、勝利をより確実なものにするため、自衛隊とは別に、10万人規模の「民間領土防衛隊」を組織する。自衛隊を支援し、国家・社会を防衛しようという意思のあるものは、国籍・年齢・性別・職業を問わず、誰でも参加可能である。明日から登録を開始する。》

しんそこ驚いた。あまりに軟弱だと思っていた岸田政権がまさかここまで秘密裏に準備していたとは！ 自民党の底力を見くびっていた。私はこれから岸田政権を支持する！ 断固、支持する！ 私はすぐに民間領土防衛隊に参加する！

いよいよ銃をとるときだ。しかしここは日本だ。アメリカではない。手じかなところに銃はない。心配は無用だ。銃は自衛隊が支給してくれるはずだ。それに、考えてみれば、私は本物の武器を身につけたことはない（学生時代に「角材」を扱った程度だ）。私により相応しい貢献の仕方もあるはずだ。「ペンも剣よりも強し」ということもあるではないか。「民間領土防衛隊」の広報担当者に志願するのはどうだろうか。防衛大学から海自にはいった高校のときの同期生のM、大学時代に一度あったきり、半世紀前後会っていないが、たしか毎年、年賀状はきていたはずだ。彼に頼んで、民間領土防衛隊の「北方領土派遣隊」(これはすぐに編成されるはずだ)の広報担当におしこんでもらおう。「広報担当にぴったりの男がいる。高校のときは勉強ができた、もっともオレよりはちょっと下だったけど。大学の時は学生新聞の編集長だったらいい。卒業したあとは出版の仕事をやっている、社長らしいんだが、自分の会社の広告宣伝を自分でやっているらしい、ちいさい会社なんだろうな。だけど、英語とフランス語がよくできる。だから、海外のプレスにも対応できる、と言っている」とかなんとか、多少は誇大宣伝もまじえて推薦してもらえば、すぐにOKということになるだろう。すでに退役しているだろうが、彼は将官クラスだったはずだから、そのくらいのことはできるはずだ。もしかすると、彼はすでに「民間領土防衛隊」の司令部の一員にでもなっているかもしれない。しかし、じつは、高校の時はアイツはオレよりも勉強ができなかったはずだ、アイツの下で仕事をするのは…… バカな！ これから戦争だという時に、なにを考えているんだ！ ……ウクライナ、勝利！ プーチン、打倒！ 日本、勝利！ プーチン、打倒！

さあ、これからは日本だ、北方領土だ。

考えてみると、日本人と話すときに、いちいち“to be or not to be, that is the question”とか“poutine à bas! stalinisme à bas! impérialisme à bas!”などと付け加えていても仕方がない。これからは日本語で、「憂きことのなほこの上に積もれかし限りある身の力ためさん」とでも付け加えることにしようか。私の

好きな「行き暮れてこの下陰を宿とせば花や今宵の主ならまし」とか「かにかくに渡民村は恋しかりおもひでの山おもひでの川」とかは、私がこれからすることになるだろう会話の文脈上、やはり、ちょっとまずい。この二つの歌はしばらく封印しておくことにしようか。

大論文(!)を書き継いできて、頭がだいぶ混乱してきた……憂きことの to be or not なほ poutine
この上に積もれか to be, that is the し限り question ある身の力た à bas! impérialisme めさん à bas!
stalinisme à bas! ……

(2022/03/31)

執筆者について——

鈴木宏（すずきひろし） 1947年生まれ。水声社社主。著書に『風から水へ——ある小出版社の35年』（論創社、2017年）がある。